

---

# バカとテストと洞察眼

ぬぬぬぬぬ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと洞察眼

### 【Zコード】

Z0481Y

### 【作者名】

ぬぬぬぬぬ

### 【あらすじ】

少し鋭い普通の高校生、火坂悠介。彼はいろんな危険が一杯のFクラスの中で、危険を察知し回避していくのか？そんな話です。主人公は別にチートではないです。

## 主人公設定

### プロフィール

火坂 悠介ほさか ゆうすけ  
16歳 男 2・F所属

身長170? 体重52?

本作品の主人公。Fクラスの貴重な常識人であり、日々いろんな事があるFクラスに翻弄されている。得意科目は化学、物理等で、得意な理由は興味が持てたかららしい。逆に興味の持てない大体の教科は壊滅的な点数。ケンカはそれなりには出来るが雄一ほどではない。人の本質を読む能力に長けており、言動を少し見ていればだいたいわかる。母が死んだ後父が再婚した継母を嫌つており、継母との関係は険悪。今はアパートでバイトをしながらの一人暮らし。

## 主人公設定（後書き）

どうも、作者です。

主人公の性格はあまり決めてません。

悠介「なんで？」

作者「性格を設定したらいろいろやりたいことをやれないと思ついたんだ‥。まあ性格はFクラスで過ごしながら形成されていくってことで、どう？」

悠介「おもつく手抜きじゃん！しかもあいつらの中じゅうくな人間にならんぞ！」

まあとにかく頑張っていきたいです。

## 第一問

「」は世界初の試験召喚システムを使用している文翔学園。

桜の木が両端に並ぶ道を一人の青年がのんびりと歩いていた。

「おはよー、火坂」

顔を上げると、スポーツマン風の背の高い先生が立っている。

「おはようございます鉄じ・・・・・鉄人先生」

俺は一度つっかかったものの、面倒くさいので訂正をせずに西村教諭の愛称？で呼び返事をする。

「一度止めたならそのまま言ひんじゃない。それに先生をつけねば

いいといつものでもないぞ。」

すると鉄人こと西村から意外ともの柔らかな返事が帰つてくる。そこで、

「どうしたんですか？化け物にしては優し過ぎません？何か変な物でも食べましたか？なんでそんなに肌が黒いんですか？」

と、目の前の非人間をいたわつてみ……おっと最後つい日頃の疑問が。

「口の悪さは相変わらずだな馬鹿者が…………まあいいそれよりお前……大丈夫なのか？」

「大丈夫かとはあの事ですか？別に僕の人生に1ミリも影響はありませんよ。」

「お前な……いくら何でも3ヶ月近く無断欠席を続け、しかも母親が失踪したと聞いたんだ。心配せずにいられるか」

鉄人は俺の発言に怪訝な顔をする。

「息子を置いて出でいくような母親なんていってもいなくとも変わりませんよ。それに元々あのゴリ以下の女に母親としての感情を抱いたことはねえ。」

あの母親・・・・いや、血のつながらない継母は三ヶ月前に父が死ぬとその一週間後に家を出て行った。別に悲しくはない。元々あいつには家族としての愛情を抱いたことはなかったし、あっちだつてそつだつたりつ。

「・・・・・・・・・・・・

「気にする事はありませんよ。オレの中では割りきってる事です。」

「そりか・・・・・・済まなかつたな・・・・・・・・・。まあこれから学園生活を目一杯楽しむといい。お前のは・・・・・・・これだ。」

鉄人に気にする事はないと言つと、鉄人は申し訳無さそうにしながら茶色い封筒を渡してくる。

恐らくクラス分けの封筒だらつ。

しかし鉄人に人を心配する心があるとは・・・・・

「お前今俺に失礼なことを考えているな?」

「いえ、そんな」とは。

くつ、こいつは人の心を読めるのか？さすがは人外なだけある・・・。まあそんなことよりクラスはどこだろう？予想はつくけど。

『火坂悠介 Fクラス』

まあそんなもんだらうな・・・・・総合は一一千一百点ぐらいだし・

ああ・・・・なるべく平和でないらしいクラスだといいなあ・・・・

そんなことを考えながら、オレ水上悠理は2Fへ向かつた。

これから待ち受ける数々の災難も知らずに・・・・・

## 第一問（後書き）

どうも、作者です。

主人公、口悪いですね。作者はどちらかと言つと礼儀正しい主人公が好きなんですがなんでこうなったんだろう・・・

## 第一問

「何だこの教室は？・・・・・・・・・・。」

オレが思わずそう呟いた原因は2年Aクラスの教室。リクライニングシートにノートパソコン、個人工アコンに冷蔵庫まである。多少の事では驚かない性格のつもりだが、この設備には思わず足を止めて見いつてしまふ。

こんな設備なんてアリか？確かに注目の試験校だからスポンサーも多数ついていると聞いてはいるが・・・。オレが2 Aの前で立ち尽くしている間にも、Aクラスの生徒が教室に入つて行く・・・・・。

あの子可愛いけど残念な胸だな・・・・・・・。

おつといじりこっちゃいられないな。ひとつひとFクラスにいかないと。

またゆづくつと歩き出しながら田に入る教室を眺めて行く。

Bクラスは・・・結構広いな。Aほどではないが。でも室外機もついてるし、モニターもある。これならFもわりと普通の設備かもな・・・上位クラスがこんなに豪華なら・・・・。

Cクラス・・・・まあ少し大きい“いい教室”って感じか？設備もまあまあ・・・・・・・・。

Dクラス・・・・は少し古いけどまあ普通だな・・・・うん。ん

? この時点でも少し古い? しかもDの次はF . . . ではなくEを挿むだと? 更に2ステップか? ふざけんな!

Eクラス . . . . . ん? 机や椅子に金属が使われてないな . . . . 茶色一色な教室だ。オイオイEがこれってことはFクラスはどんな設備なんだよ? あ、ヤベ想像したくない。

さて、次がFか?

どうしよう確認したくない . . . . 回れ右してまっすぐ帰りたい . . . .

ええい! オレも男だ! 例え腐りかけの机と椅子だとしても関係ない!  
青春を謳歌してみせる!

そう決心しオレは2 Fと書かれた教室のドアに手をかけた。

第二問

アレ? こいつてどうだっけ? ちょっと待て落ち着くつオレ

ここはオレが在学している文月学園の2年Fクラス。紛れもないオレの教室・・・・・。

そして目の前には腐つた畳、脚が折れた卓袱台、綿が出ている座布団・・・・・。

最悪だ

オレは腐りかけの机と椅子でも我慢しよう！・・・とか思っていたのに、机も椅子もねーじゃねーか！廃校寸前の小学校でもまだましな設備しどるわ！

しかもなんだあの黒い覆面をして鎌を研いでいる集団は・・・・?  
オレの幻覚? そうであつて欲しい!

・・・・・はあ・・・・・オレ疲れてるんだな・・・・・。

そうオレが必死に現実逃避をしていると、

「お前が火坂悠介か？」

赤毛の背の高い筋肉質の男がオレに話しかけてきた。

今は現実逃避で忙しいんだが・・・。まあ無視するのも新学期早

々失礼か。

「ああそつだが、なぜオレの名前を？つかアンタ誰だ？」

「オレはこのクラスの代表の坂本雄一だ。お前の名前は一年のときから知ってる。まあ戦力確認つてトコだ。」

「戦力確認ね・・・オレは戦力になりそうかい？」

「オイオイ謙遜すんなよ。お前の成績はわかってる。」

「オレ総合で1100点ぐらいだぞ？」

「オレなんて戦力にならないと坂本に伝えようとするが、

「ああ、それは知っている。そして科学と物理の点数もな。」

と、坂本がにやけながら言つてくる。

坂本はオレの得意科目の点数も知つているのか？

「まあ試合戦争では期待しているぞ。」

「ちつ、オレは参加しないつもりだつたんだがな・・・・・・面倒くさ。」

そう言って近くの席に座りホームルームが始まるのを待つことにする。

すると、

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ

茶髪の生徒が教室に入ってきた・・・

「早く座れ、このウジ虫野郎。」

罵倒された。

いきなり人をウジ虫扱いとは・・・口が悪いな坂本・・・。  
そして今入つて来たやつ・・・・・なんだコイツは?  
今まで会つたどの人とも違う・・・?

この間の抜けた顔、かなりバカそうな印象・・・いや、確信に近い  
ものを感じる。人の本質を察するのはなぜか昔から得意だからな・・・  
・。まず間違いないだろ?!

そうオレが考へていると、

「・・・雄一、何やつてんの?」

田の前のバカ(そう呼ぶことにした)が坂本を下の畠前で呼んでいる。

やつぱりなんかバカっぽいな・・・って坂本！そいつ友達かよ！  
友達に会った第一声がウジ虫かよ！

はあ、変な奴ばっかだこのクラス・・・。  
声で分かつたがその黒覆面、クラス同じだった須川だな・・・。  
そう言えば去年、須川の机をふと覗いたら同じような覆面があつた  
ような・・・。

オレこのクラス唯一の常識人かも・・・

そう思いはじめた。

## 第三問（後書き）

どうも、作者です。

ようやく雄一と明久登場。主人公は明久のバカさを見抜きました（笑）。原作キャラと絡めるのは難しいです（苦笑）。

#### 第四問

このクラスの担任……福原先生が来てホームルームが始まつていた。

このクラスの担任とはアンタ大変そうだな……

オレがそんなことを考へているとクラスはいつの間にか自己紹介タイムに突入

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

ん？こりやまた可愛い……つーかなんかどつかで見たよーな？…  
・気のせいか。んで男子の制服……つてアイツ男！？でも可愛い…  
・・・・つて男だつて！

「……………」

「……………」

木下の自己紹介が終わり小柄な男子生徒が立つ

「……………土屋康太」

今度はなんか寡黙な奴だな。ん？アイツのポケットにあるデジカメと大量の写真はなんだ？まあ彼にも事情があるのかもしれないと思いたい出来れば。

「……………」

「……………」

あれもう次か？土屋は名前だけか。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので、趣味は」

「この声は女子か？見渡す限り男子だから女子は貴重だな・・・」

「趣味は吉井明久を殴ることです」

なんだそのバイオレンスな特定された趣味は！？そしてマークはそんな言葉につけるものじゃないつ。

「はいはいー」

アレ？こっちに手を振ってる？？？いや違った。いつの間にかオレの隣に座つているさつきのバカだ。「おいバ、吉井って言つたか？あのバイオレンス女お前の知り合いか？」

隣のバ、もとい吉井とやらに聞いてみる。

「うん一応去年同じクラ・・・今僕のことバカって呼ばばうとしなかつ「気のせいだ」そう・・・まあとにかく彼女は知り合いで僕の天敵だよ。あ、次は僕だね」

順番が回つて来て吉井が自己紹介を始める。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『『『ダーリー リイ ン』』』

う・・・なんつー大合唱だ・・・氣分が悪くなる。このバカなん

て自己紹介を……吉井も吐きそうだな……まあ許してやるか。おつと次はオレかな?今みたいなこともあるし、簡単でいいや……。

その後は(オレも含め)名前を告げるだけの作業が続き、オレが暇すぎて空はなぜ青いんだろう?……なんて考え始めた頃、ガラリとドアが開き胸に手を当てた女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えつ?』

おやへ~アイツはたしか……

「ちよつじよかつたです。今自己紹介をしていくんですけど姫路さんもお願いします」

「は、はい~あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします~・・・」

そつだ、あの学年次席の姫路瑞希だ!でもなんぐ……

「はいっ~質問です~!」

あ、誰かが聞いてくれるっぽい。

「なんで!ここにいるんですか?」

聞きようつこいつては失礼な質問だが、学年次席がFクラスともなれ

ばまでてくる率直な疑問だろう。かくいうオレも気になる・・・。  
・ん？吉井がなんか複雑な顔をしてるな。吉井はしつてるらしい。

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまって・・・」

なるほど。途中退席は〇点扱いだからな。少し厳しいがしかたのないことだろ・・・。

『さう言えど、俺も熱一（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかつたな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩彼女が寝かしてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

しかたのないバカばつかりだ・・・。

## 第五問

「あ、緊張しましたあ～・・・」

さつき自己紹介した姫路がバカと坂本の間に座る。

お前その二人の間に座るのか？その二人は（特に吉井）オレの中で  
は最上級危険人物だぞ？

「あのさ、姫

「姫路

あ、バカが姫路に話しかけたら坂本に遮られた。

「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

坂本の自己紹介に姫路が丁寧に答える。もしかしてオレ以外の常識  
人がいるのか！？

自分以外の常識人と思われる生徒に興味が芽生え、彼らの会話に耳  
を傾ける。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

バカが口を挟む。

「よ、吉井君！？」

バカを見て驚く姫路。何にそう驚いたんだ？

「姫路。明久がブサイクですよん」

坂本がフォロー···違った。そのバカを追い込むただの暴言だった。つかそこのバカは結構美少年だぞ？

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ···むしろ···？何？まさか···」

「そう言われると、確かに見てくれば悪くない顔をしているかもしないな。俺の知人にも明久に興味を持つていてる奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰」「そ、それって誰ですかっ！？」

そのままかだつたな···。でも当の本人は自覚なさそうだ。姫路は厳しい恋路になりそうだな···。

あり？目を離した隙に吉井が声を殺して泣いてる。なんでだろ？

「はいはい。そこの人たち、静かにして下さいね」

福原先生が霸氣のない声で警告する。

バキイツ バラバラバラ・・・・

あ、教卓が木屑に変身した。今の軽い叩きで壊れる教卓に何を載せ  
るんだ？そんなん・・アレ・・・上手い例えが見つかんない。

そんなことを考えてると、

バカが坂本に話があるようで二人で廊下に出て行く。少し聞いてみ  
るか・・・

「 それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし おっと、  
先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

なるほど？バカは姫路のために設備を変えてやりたいとな？あのバカにもいいところがあるじゃないか。今度からはちゃんと吉井と呼ぼつか？

オレが自分の中の吉井評価を改めているとまた自己紹介が始まつていた。ん？次は坂本だな。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

坂本がゆっくりと教壇に歩み寄る。その姿にはふさけた雰囲気は皆無で代表としての貫禄が見られた。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

代表といってもF代表じゃオレらと大差ないがな・・・

「さて、皆さん一つ聞きたい」

オレは「」に单なるF代表以上のなにかを感じる。今も上手く間をとることでほぼ全員が坂本の話に引き込まれている。

坂本は皆の様子を確認し、視線を教室内の各所に移す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて全員が坂本の視線を追い、それらの備品を眺める。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい  
が」

一呼吸。

「不満はないか？」  
『『『』大ありじやあつ！』』

ちょ、つるさい。

「どうう？俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識  
を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからつて、この設備はあんまりだ！改善を要求  
する！』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる  
！』

不満の声が次々とあがる。やはり坂本の人を動かす才覚は本物かも  
しれない。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

不敵に笑う坂本。「この話の流れ……やるのか？」

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思  
う」

## 第六問

「 FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ」

坂本がAクラスへの宣戦布告を切り出す。

「勝てるわがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

案の定そんな夢物語は無理だという声一（最後は違う）があがる。オレも正直いくら姫路がいてもAクラスには勝つのは難しいと思う。なにしろAクラス代表の学年主席霧島翔子は、姫路以上の点数なのだ。姫路を除くFクラス全員でかかっても勝てるかどうか？

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たしてみせる」

しかしそれを知りながらも坂本はAクラスに勝てると言つ。

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろ？」

「何の根拠があつてそんなことを

否定的な意見が続出する。

「根拠ならあるさ。」このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

そう言つと得意の不敵な笑みを浮かべ、何人かのクラスメートを見る。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・（ブンブン・）

ん？さつきの無口な奴か？あんなに思いつき覗いてたのに今さら否定すんなよ・・・・・・あ、頬の畳の跡も隠してる。

「土屋康太。こいつがあの有名な、ムツツリー＝《寡黙なる性識者》だ

「・・・・・・・・（ブンブン）」

あいつがあのムツツリー＝なのか？確かにまだ頬の畳の跡を隠そうとするあたり、本物だろう。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその実力はよ

く知つてゐるはずだ』

「えつ？ わ、私ですか？』

『ああ、ウチの主戦力だ。期待している。』

確かに学年次席がいるだけでかなりの戦力になるだろう。

『木下秀吉だつている』

次にさつきの美少女？ の木下の名前が出る。オレはよく知らないが、成績優秀な姉や演劇部のホープだということで有名ならしい。

『当然俺も全力を尽くす』『確かになんだかやつてくれそうな奴だ』

『坂本つて小学生の頃は神童とか呼ばれていなかつたか？』

『実力はAクラスレベルが一人もいるつてことだよな！』

クラスの士気がガンガンと上がつていいく。さあ坂本、もう一押しだ！

『それに、吉井明久だつている』

あ、そつちに持つて行くんだ・・・。

「それに、吉井明久だつている」

・・・・・シン

クラスの士氣が一気に下がる。

オチは僕かよー！）で僕の名前を挙げる意味なんてないだろ！

「ちょっと雄二ー..びうして僕の名前を呼ぶのさー全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！折角上がりかけてた士氣に翳りが見えてるし！僕は雄二ーた  
ちとは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを つてな  
んで僕を睨むの？士氣が下がつたのは僕のせいじゃないでしょー！」

最近雄二ーが友達と呼んでいい関係なのかわからなくなつてきた。

「そつか。知らないよつなら教えてやる。ここの肩書きは「観察  
処分者」だ。」

ちょっと！それは言わなくてもいいでしょう！僕がバカだつて皆さん  
ばれたらどうするんだ！

「観察処分者つてなんだっけ？」

しめた！まだ観察処分者の意味がわからない人もいる！今ならまだ  
ごまかせ・・・

「バカの代名詞だ」

うぎやあ！隣の人から致命的な台詞が！て言つかさつきこの人僕を  
バカつて呼び掛けた人だよね？

「ちょっと！僕がバカだつて皆にばれちゃうじゃないか！」

隣でやる気の無さそうな生徒に小声で話しかける。

「大丈夫だ。俺はちゃんと一目見たときお前の真の人物を見抜いた」

「え？ 本当？」

やつぱりわかる人にはわかるんだろう。僕が唯のバカじゃないって  
ことを。

「お前は正真正銘のバカだ」

「ちょっと！それは僕の真の人物像がただのバカだつてこと！？」

## 悠介 side

隣の観察処分者を少しけなしてみた。ここにはいろいろと面白いなあ。

『おいおい。

「観察処分者」ってことは、試合戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおこなれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

オレたちが話している間に皆の間でも話が進んでいく。

「気にするな。どうせいてもいなべても同じような雑魚だ」

坂本・・・お前最初から吉井を睨るために吉井の名前出したのか?  
?鬼だな・・・

「雄一、そこには僕をフォローする台詞を言ひべきだよだよ?」

吉井・・・坂本にはフォローするつもりは毛頭ない。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはロクラスを征服してみようと思つ」

「うわ、すつごい大胆に無視された！」

「吉井・・・・さつきはけなして悪かったな。少し同情してきたよ・  
・・・・と心にもないことを言つてみる」

「本音がだだもれだよ畜生！」

あれ?」の位置間違えた。しつかりしろよ作者!

「皆、この境遇は大いに不満だろ?」

『『『当然だ!』』』

「ならば全員ペンを持ってー出陣の準備だ!」

『『『つねおー つー.』』』

なにはともあれついに俺達の試合戦争が始まった。

## 第七回（前書き）

一話から六話が改行され、それに感じたのをやつと全部修正しました。  
疲れますね・・・

## 第七問

坂本が気焰を上げ、ついにFクラスの試召戦争が始まった。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもう。無事大役を果たせ！」

坂本・・・絶対無事には大役を果たせんぞ・・・下位クラスの使者はボコられるのが普通だ。

「・・・下位勢力の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

お、気づいた。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみる」

お前は本当に騙す氣だろが。

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

オレは友達を迷いなく騙す最低な人間だと思つ。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

あ、吉井は友人だと思ってないんだ。

「わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ」

そう言うと吉井は胸を張つて教室を出していく。吉井・・・お前は本当にバカなんだなあ・・・。

「火坂、心配なら行つて助けてやればどうだ?」

坂本がオレにも行くかと言つてくる。愚問だな。オレの答は決まつてる!

「断固拒否、だ」

「お前はそういうヤツだと思ってたよ」

アレ? なにもしないのに何この悪人扱い。

十分後

「騙されたあつ！」

あ、吉井。生きてたみたいだ。

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよーやつぱり使者への暴行は予想通りだつたん  
じやないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。なつ火坂  
？」

「まあな。そんなことも予想できないやつはただのゴミだな」

「少しは悪びれろよーそして火坂君！他の人をゴミ扱いだなんて君  
は人間のゴミだ！」

じゃあお前は一重の意味でゴミだな。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷

「吉井、本当に大丈夫？」

「平氣だよ島田さん。心配してくれてありがとう」

おいおい可愛い女子一人に心配されちゃって幸せなやつだな……。  
。

「そう、良かつた。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」  
「ああっ！もうだめ！死にそう！」

「ごめん吉井。お前は安息という言葉とは程遠い人生になりそうだな。  
そして島田、お前は吉井をどうしたいんだ？もしかして今流行りの  
ツンデレ？とすると島田の想い人は……。

「おし、今からマーティングを始めるぞ。火坂、お前も来い」

「はーいよっ」

少し確認したいこともあるし……ま、外れてる気はしないけど。

「おい、島田」

「何？えっと……」

「火坂悠介だ。よろしく」

「火坂ね？こちらこそよろしく。それで、何か用？」

「ああ……お前吉井のことが好きなのか？」

「なつ！なによあんた一体！いきなり何を言い……」  
「あー、もーいーよ。その反応で誤魔化せる方がおかしい」

「くつ……本人には内緒にしなさいよ……」

「そんな野暮なことするかよ。見守つてやるから安心しろ」

「アハ？ ・・・ なりいこけど」

つまりこいつは好きな人になんか暴力的なこと言つてんのか？ こいつは吉井とどんな関係になりたいんだ・・・。そんな考え方をしてるといつの間にか屋上に。・・・土屋、姫路のスカートはせつき覗いたんじやないのか？

さて、ミーティング開始。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯つてことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ごはんはまともなものを食べらよ？」

「いつも思うならパンでもおひつてくれるト嬢しいんだけど」

なんだ？ 吉井はいつも何食つてんだ？

「おい木下、火坂悠介だ。まあよろしく頼む」

真相を確かめるべく、隣の木下に話しかける。

「つむ、まひじくなのじや。」

「といひで木下、吉井はいつも何を食つてゐるんだ?」

「明久かの?それは・・・あ、今話しておるだ

どれどれ?

「いや、お前の主食って 水と塩だらうへ

坂本の哀れむような声。「え? そんな無機物しか食べてない状態でヒトは何日間生きられるの?」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな

「し、仕送りが少ないんだよ。」

なぜその少ない仕送りを遊びに使い込む。

「・・・・・あの、良かつたら私がお弁当作つてしま jóうか?」

「へ?」

お、姫路がアプローチ。

「本当にこいいの?僕、塩と砂糖以外の食べ物なんて久しぶりだよ

!」

お前のその発言はマジで笑えん。

「はい、明日のお腹でよければ

「ありがとう姫路さん！」

「・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作つて  
くるなんて」

お？島田が妨害してきた。どうする姫路？

「あ、いえーその、皆さんにも・・・」

「俺たちにも？いいのか？」

「ん？なんだこのざわざわした感じ？」

「はい。嫌じやなかつたら。あ、火坂君もどうですか？」

「あれ？姫路さんと火坂君つて知り合い？」

「悠介でいいよ。まあ、去年同じクラスでな。」

「それでお弁当はどうですか？火坂君？」

ど、どうしよう。外から見たら羨ましい光景だけど、さっきからオレの中の危険を告げるブザーが鳴りっぱなしだ・・・オレの第六感が本能的に反応している・・・震えが止まらない！

「どうしたのさ悠介？震えるほど嬉しいの？」

「い、いや吉井、オレは遠慮し・・・」

「火坂君つたらそんなに楽しみなんですか？じゃあ火坂君の分も作  
つてきますね！」

「あ・・・どうも・・・」

そんな眩しいぐらいの笑顔で言われたら断るにも断れないじゃないか・・・。いや姫路を信じるんだ！彼女はFクラスの残り少ない常識人（オレ、木下、姫路）の一人じゃないか！現に七人分も弁当を作るというのに嫌な顔一つしない。こんないい子が作る弁当が不味いわけないよ！うん！

「本当にありがとうございました姫路さん。姫路さんつて優しいね」

吉井が姫路に礼を言ひ。吉井には以外にも天然人たらしの才能があるのかも。

「そ、そんな・・・・・」

照れる姫路。・・・・別に嫉妬じゃないけど、このほほんとしたやり取りみるとぶつ壊したくなる・・・。

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「にしたいと思つていました」

明久・・・なに失恋回避成功！みたいな顔してんだ？失恋どころか変態になつてしまつ自分の発言を聞いてたのか？

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ」

流石秀吉。ツツコミビニカルを的確に突いた上手いツツコミだ。オレとお前はこの物語の数少ないツツコミ役として過ごしていくだろう。精進してくれ・・・。

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

坂本・・・オレもさつきからお前と吉井に想像を超えたやり取りを見せつけられてる気がする。

「雄一。一つ気になっていたんじゃがどうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「まあな。色々と理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

「吉井、お前の周りにいる面子を見てみろ」

理解できくなれりうな吉井に助け舟を出す。

「美少女一人と馬鹿が三人とムツツリが一人いるね  
「誰が美少女だと！？」

「ええつー？雄一が美少女に反応するの？」

「・・・・・・（ポツ）」

「ムツツリーまでー？どうしよう、僕だけじゃツツ」「!!やれない！」

「まあまあ。落ち着くのじや、代表にムツツリー！」

「やつだ、吉井がオレをムツリ扱いしたのは置いといて説明を続けよ！」

「いや、悠介も間違ってるじゃないか！」

吉井が何か言つている。なに？ ムツリはオレじゃない？ オレが美女だと云うのか？ 失礼なやつめ！

「ま、要するにだ」

「姫路に問題がない今、Eクラスとやつても練習相手としての意味がないって意味だろ？」

オレが坂本に続けて言つ。

「まあだいたい火坂の言つ通りだな。それに打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「でも、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

「負けるわけないぞ」

吉井の心配を坂本が笑い飛ばす。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

面白そうじやないか。オレも乗つてやるわー。

「それじゃ、作戦を説明しよう」

久しぶりに楽しくなりそつだ。

## 第八問

「吉井！木下たちがロクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

同じ部隊に配属された島田が叫ぶ。

「よし！吉久！」

「了解！・・・つてそんなミックスな名前で呼ばないでよー明久でいいから！」

「わかった。行くぞバカ久！」

「それはさつきより酷いからねー!?」

「ホラ、吉井も火坂もさつさと行くわよー！」

コントをしているオレとバカ久を島田が急かす。ん？明久・・・島田をじつと見てどうした？

「ああ、胸か」

おい！そんな重量級の地雷踏まなくていいから！

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全文きれいに」

そして島田ーすぐそういう発言が出てくる女の子は人生で初めてだよー。

「お、落ち着け島田、試験戦争に集中しよう!」

オレが島田を必死に宥めてる間に、報告係が走つてくれる。

「火坂! 前線部隊が後退を開始したぞ!」

え? もう?

オレたちがいるこの部隊は前線の援護を担当しており、前線部隊が点数を補給する間戦線を維持するのが役目だ。

「よし、明久、島田、行くぞ・・・って何逃げようとしてんだよ!」

「悠介、僕らには荷が重すぎだよ」

「そうよ火坂、ウチらは精一杯努力したわ」

「努力つてまだ敵の姿も見てないだろ・・・ん? 横田、どうした?  
?」

「代表より伝令があります」

「『逃げたらコロス』」

「全員突撃しろお つ!」

坂本は本当にこいつらの扱いが上手いと思つ。

「吉井、見て! 五十嵐先生と布施先生よ! Dクラスの奴ら、化学で勝負するつもりね!」

「島田、化学は自信あるか?」

「全くなし、60点台常連よ」

「よし、それじゃあ五十嵐先生と布施先生に近づかないと、ひに注意して戦おう」

「ん、明久。その必要はないぞ」

「なん  
で？」

「理由をこいつは「お姉さまああーーー...」・・・・・なんだ?」

「ちょっとー！やめなさい、美春ー。」

ふと見ると髪をツインのロールにした女子が島田に抱きついている。  
も、もしかしてリアルG-?

「よし。島田さん、ここのは君に任せて僕は先をいそぐよ。」「ちよ  
つ・・・・・普通逆じゃない!?』ここのは僕に任せて先に行け!』  
じゃないの!?』

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！」

やれやれ・・・・」これらの仲はなんなんだか。

「吉井、逃げる必要はないぞ。試験召喚！」

オレの足元に幾何学的な魔方陣が現れ、柄の長めな槌を持つた召喚獸が出てくる。

「美春とお姉さまの邪魔をする豚野郎は全員殺します！試験召喚…」サモン

え？何この子・・・こわ・・・

『Dクラス 清水美春 94点』

でも今は生身じゃなくて召喚獣のバトルだ！恐れる必要はない！

「行くぞ！」

オレの召喚獣が清水の召喚獣めがけて突っ込み、巨大な槌を振り降ろす。

ガキイツ！

清水の召喚獣が刀で受け止める。

「火坂！美春はDクラスなんだから正面から行つたら不利よー！」

島田がオレに警告をする。

「大丈夫だ」

ピシッ、バキン！・・・

次の瞬間、清水の刀は二つに折れていた。

『火坂悠介 Fクラス 化学 368点』

「え？え？武器が・・・」

「これでどどめだな」

清水の召喚獣の頭めがけて槌を振り降ろす。

「ゴン！」

おういい音。生身でやつたのなら頭蓋が砕けた音だな。

『Dクラス 清水美春 0点』

「戦死者は補習！」

うわ、鉄人が清水を担いで運んでる。

「お、お姉さま！ 美春は諦めませんからー…このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」

物騒な捨て台詞だなオイ。

「そしてそここの豚野郎！ 美春の邪魔をしたこと絶対に後悔させてやります！ 首を洗つて待つてなさいー！」

え？ オレ？ オレが悪いの！ ？

なんか無駄に恨みを買つた気が…

「火坂…アンタそんな化学点数高かつたの？」

「あん？ 今回は少し調子が悪くてな。400は行かなかつた。」

「調子悪くてあの点数なんだね…」

「さて、オレは一旦教室に戻るぞ」

「え？ なんですか？」

「坂本にあまり点数を見せんなって言われてんだよ。まあ次の試験戦争のことを考えてだろ」

「そうなんだ。じゃあお疲れ様」

「ああ。そつちも頑張れよ」

そう言つとオレは教室に向かう。ん~、だいたいわかつたけどまだ操作のコツはつかめないな・・・。坂本がオレを少しだけ出したのは召喚獣操作に慣れさせる意味もあるんだろう。まあとにかく今回のオレの役目はこれで終わりだ。後は頼ん・・・「死になさい、吉井明久！ 試験召喚！」 「誰か！ 島田さんが錯乱した！ 本陣に連行してくれ！」・・・吉井、死ぬなよ・・・！

「おーす。戻つたぞ坂本。」  
「おー。召喚獣の操作感覚はどうだ？」

「まだコツはつかめないけど、だいたい慣れた。自分より低い点数の相手なら負けることはないだろ。」

「そうか。それなら十分 どうした須川？」

「おお坂本。数学の船越を戦線から遠ざけないとけないんだ！なにか策はないか？」

「なるほど？・・・よし、須川これだ！」

「Iの紙の内容を放送すればいいんだな？」

「そうだ。頼むぞ須川」

坂本が嫌な笑みで須川になにか命令すると、須川は放送室の方に走つていった。

「坂本、須川に何をたのんだんだ？」

「聞いてのお楽しみだ。」

なんかその笑みを見ると全然楽しみにならないんだが・・・・・。あ、またオレの警報ブザーが鳴つてゐる。靴ひも確認、出口確認、よし！

ピンポンパンポン

お、始まつた。

『船越先生、船越先生』

さあどうするんだ？

『吉井明久君と火坂悠介君が体育館裏で待っています』

え！？それは反則だろ！

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

畜生！婚期を逃して生徒に単位を盾に交際を迫るよつた船越女史に  
そんなことをしたら・・・・・オレの貞操の危機じやないか！坂  
本、許すまじ！

「甘いな坂本・・・」

「なんだ火坂、速く逃げなくていいのか？」

にやりと笑う坂本。馬鹿め！貴様も一緒に地獄に来てもらう！

「あばよ坂本！童貞卒業おめでとう！」

放送室にダッシュだ！

「なんだと？何を言つて・・・・ちよつと待て！」

「おつと坂本。代表が軽々しい行動をとつていいのか？」

「くつ・・・」

代表といつ立場を利用して坂本を止める。坂本、終わりだ！

ピンポンパンポン

全校放送にするか。

『数学の船越先生。Fクラス代表の坂本雄一君がついに意を決して船越先生と幸せになりたいそうです。旧校舎の空き教室で婚約書を持っています。すぐに行つてあげて下さい』

おし、復讐成功。どこかで坂本の悲鳴が聞こえる。一緒に地獄へ行こう坂本・・・・。

旧校舎にだれかの狂ったような笑い声と、どつかの代表の悲鳴が鳴り響いた。

その後はオレは戦争には加わらず、話によると姫路がロクラス代表を200点差で瞬殺したらしい。皆！初勝利おめでとう！坂本！新婚おめでとう！

## 第八問（後書き）

どうも、作者です。

悠介「最後思いつきりかづけばいたな」

作者「ん~、いろいろ考えたんだけどなんか原作と大差ないしいいかなって」

悠介「この作品まだ全体的に原作通りだる」

作者「まあ船越女史の標的に悠介と雄一も加わったぐらいだよね」

悠介「そりだよー!どうしてくれんだ!」

作者「これを機に船越ルートに変えるとか?」

悠介「ちよつと待て、変えないならだれの予定なんだ?」

作者「え?もう出てきたよ?」

悠介「?」

まあヒロインはBクラス戦の後に本格的に登場をせよつと思つてます。上手く出来るかわかりませんがお楽しみに!」

あとなかなか評価や感想等もらえませんね・・・。評価はともかく、感想はあつた方が嬉しいです・・。悪い部分、おかしい部分などの指摘でも構いませんのでなにか感想が欲しいなあ。面倒だと思いますが書いてくれると嬉しいですね・・。

## 第九問（前書き）

今日は難しかつたです・・・。

姫路の弁当編は・・。

第九問

なんで・・・・・

なんでそんなに幸せそうに笑つてんだ?

オレたちもう会えなくなるんだろ?

アンタ死んじまうんだろ?

『悠介!』

なのに・・・・・

なんで・・・・・!

なんでそんなムカツクぐらいの笑顔をしてるんだよー！

Dクラスとの試合戦争に勝つた翌朝、オレは歩いて学校へ向かって

い。

あ～・・・・・またあの『夢』だ・・・。気分悪い・・・。

オレの頭にあの【笑顔】が浮かぶ。あれから3ヶ月か・・・・・

「おはようなのじや、悠介ー!」

お、木下だな。

「ああ、おはよう木下のじ・・・・・」

アレ?何?の違和感?・・・・・ああ、なぜこの名前呼びなんだ?

「何を?」惑つておるのじや?お主は昨日ワシ等と一緒に戦つてくれたのじや。だからお主はもうワシ等の仲間じや。仲間なら名前で呼び合わんとな」

「ア、せつか、じゃあ・・・おはよ秀吉」

きのし・・・秀吉の言葉に少しむずがゆい感覚を覚える。なんか恥ずかし・・・

ガララッ

秀吉と一緒に登校し、教室のドアを開ける。あれ、設備が変わった  
ない。まあ坂本になにか考えがあるんだる。

「あ、おはよう悠介

「おう明久か。昨日は災難だつたなオレたち・・・」

「そうだね。でも悠介が雄一も巻き込んだおかげで胸がスッとした  
よーいいザマだね雄一は

「まつたくだ

どれどれ坂本はつと・・・・・チッ、元気に登校してやがる。

「おい坂本。新婚生活は楽しめそうか?」

「火坂・・・・テメエやつてくれたじゃねえか・・・  
ん!? オレの警報ブザー発動! 教室の出口確認! オッケー!

「おい須川!」いつ朝秀吉と登校してきやがったぞ!」

『『『なにいー』』』

わ!なんだ!? 昨日も見た黒覆面の集団に囲まれた!

「おい!なんだその鎌は! どうから出した!」

『諸君、ここは何処だ?』

『『『最後の審判を下す場だ!』』』

『異端者には?』

『『『死の制裁を!』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て哀に生きるもの!』』』

『よろしい。ではこれより異端審問会を始め……!火坂が逃げたぞ!捕まえろ!』

くつ気づかれたか!こうなつたら仕方ない!

「坂本が朝黒髪の美人と親しげに話してた」

『坂本を殺せえ——!』

よし、身代わり成・・ガシツ。

ん?

「悠介……秀吉と一緒に登校つてのは本当なの?」

くつ、明久か!だいたい秀吉は男だろ!確かに可愛いけどオレにそつちの趣味はない!

「くそつ、じうなつたら!」

パリイン!

窓から脱出したるわ!ふつ、バカズモの姿がどんどん上がって……

・あれ? 二階だけ・・・・・・あ~忘れてた。

と、とりあえず午前の授業が終わって昼。午後はBクラスと試合戦争だから昼飯で力をつけよう。え? なんで生きてるかって? 根性かな? ・・確かに下がアスファルトだとわかった瞬間は死ぬと思ったけど。

「食堂行こうか明久?」

「うん、いいよ。僕も今日はソルトウォーターあたりを

お前はいつも何をエネルギー源にして生きてるんだ?

「あ、あの。監さん・・・・」

「ん? なんだ姫路?」

「あ、あの、お昼ですけど、昨日の約束の・・・」

「おお、もしや弁当かの?」

「は、はいー迷惑じゃなかつたらビーフレバーハンバーグ」

「はーアーヴィーー超警級の危険が迫つてゐる感覚がー鳥肌が止まらないー！」

「迷惑なもんか！ね、雄二ー・悠介ー！」

「ああ、やうだな。ありがたい」

「あ、ああ。それより場所を変えないか？」

「ヤツリじゃな、せつかくのいじ馳走じゃし、屋上でも行くかのう」

とつあえず場所替え提案で時間を稼ぐ。

「やうだな。それなら俺がジューース買つてへむからお前らは先行つててくれ」

「あ、それならウチも行くー！」

坂本と鷗田が売店に向かう。

「僕らも行こつか」

「やうですね」

「どうするーーまだ何が危険なのかわからぬ以上行動のしようがないーーー。」

「あ、シートもあるんですね」

あ、いつのまにか着いてるし。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路が弁当の蓋を取る。

「 「 「 おおっ！」」

「ふむ、見た目は普通だな。・・・・オレのサイレンの故障ってこともあるのか？」

「あつ、ずるいぞムツリーハフ」

ムツリーハフがエビフライを取り口に運ぶ。

「・・・・・（パク）」

バタン ガタガタガタガタ

痙攣しはじめた。

僕の目の前でムツツリーーが激しく痙攣している。

「・・・・・・・」  
「・・・・・・・」  
「・・・・・・・」

思わず顔を見合せる僕ら。

「（今のどう思ひへ）」

「（どうやら明らかにあいつの料理だろ・・・・・何入れて作ったんだ・・・・・）」

「（食べたら命の保証はできるのう・・・・・）」

姫路さんにはんな弱点があつたなんて・・・・・何とか姫路さんを傷つけずにこの場を回避しないと。

「姫路・・・・調味料には何を使った？」

「（悠介！そんなことを聞いてどうするのやーなおさら食べられなくなるかもしれないよー？）」

「（大丈夫だ明久。死にたくなかつたらオレに任せろ）」

流石悠介！この場を回避する方法を考えついたんだね！一応この場

の状況をまとめると・・・

1、生き残るには料理を食べるわけにはいかない。

2、しかしせつかく料理を作ってくれた姫路さんを傷つけるわけにはいかない。

と、こんなところ。僕には雄一に無理矢理食べさせるとかしか思いつかないなあ。悠介はどうするんだろう?

「はい、調味料ですか?」

う、なんか聞かない方がいい気がする・・・。

「えっと、まず防腐剤に硝酸カリウムを・・・」

「姫路、これは食べ物とは言わん

悠介！2番はどうしたんだあー　　！

姫路に思つたままのことを言つ。明久・・・そんな怖い顔をするな・・・。もしあ前が姫路と結婚したらお前は毎日この劇物を食べなければならぬんだぞ？

「えつ！？何ですか！？」

「硝酸カリウムってのはもともと料理に使う物じゃない」

「そんなことありません！あれを入れることで長持ちして、お弁当でも美味しく頂けるんですよ！」

「長持ちとかその前に人体に影響がないか考えろ！」

ああ・・・姫路の常識人キヤラがどんどん崩れていいく・・・。秀吉・・・一人でなんとか頑張つていこう・・・。

「よお、ジュース買つて來たぞ。お、これ姫路のか？どれどれ・・・」

「

坂本・・・気の毒だがお前には姫路を説得するための材料になつてもうひとつ。

「どうした火坂？そんな哀れむような田で俺を見・・んゴバッ！」

坂本は白田を剥いて倒れた。

坂本・・・やうばー

「ちよつと坂本！？いきなりどうしたのよー？」

「姫路、これでもお前の料理は安全だといつか？」

「そ、坂本君は足が吊つただけです！」

「なにい！？認めないと！？こんだけの物的証拠があるのに・・・坂本。お前の死は無駄死にだったみたいだ・・。

「明久君も食べてみて下さい！」

「え！？僕！？」

「ちよつと待て姫路」

「ん？明久が救われたような顔をしている。すまんな明久・・そういうことじゃないんだ・・・。

「明久に食べてもらつて、明久が無事だつたらお前のは料理と認めよう。それでどうだ？」

「ちよつと待つて悠介！僕を犠牲にする気！？」

「明久・・・オレも命は惜しい！

「わかりました。明久君！さあー！」

「む！」おつー？

バタン！ ガタガタガタガタ！

さて、保健室に運びますか。

## 第九問（後書き）

評価をしてくださった人がいて感激です！ありがとうございます！

後、悪いところ、もつとこうした方がいいところとかがあつたら感想で指摘して下さると嬉しいです！

## 第十問

「そういえば坂本、次の目標だけぞ」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

復活した坂本、ムツツリー、明久らと一緒にこれから試召戦争について話し合う。お前らよく生きてるな・・・。あの後姫路から詳しく述べたら、王水をつくる化学式が完成していたことは誰にも言つていない。しかし王水飲んで生きてる人間は初めてだ・・・。人体にはまだまだ不思議がいっぱいってか？ 初めてといえば料理で王水を完成させる人も初めてだけど。

「相手はBクラスなの？」

「ああ、そうだ」

そういうえば坂本に聞いたがDクラスには設備の交換の代わりにBクラスの室外器を破壊させる約束を取り付けたらしい。何に利用するかはオレにはまだわからない。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てない」

まあ無理もないだろう。Aクラスのトップ10人は全教科がこの前

のオレの化学並みにある化け物どもだ。まあこの前のオレの化学も過去最低点数だったが。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更つてこと?」

いや、違うな。坂本も戦力差ぐらいは把握してただろう。

「BクラスもまたAクラス戦のための材料にしようつてことか?」

「まあそういうことだ。クラスだと差がありすぎるから、一騎討ちに持ち込む。それにBクラス戦が必要だということだ」

「Bクラスをどう使うのさ?」

「試合戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるな?」

「え?えーっと・・・」

「設備がワンランク下がるんだろう?」

「そうだ。つまりBクラスならCクラスの設備になるわけだ」

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は?」

「悔しい」

いや別に負けたときの気持ちは聞いてない。

「相手クラスと設備が入れ替わるんだよ。・・・おい坂本、ベンチを何に使つつもりだ」

「まあそういうルールだ。そして今回はそれを利用する」

「なるほど? BクラスにAクラスを攻めさせて、Aクラスに脅しをかけ一騎討ちに持ち込むってことか?」

「まあそうだな。かなり要約されて明久が理解できていなが

「オレが後で説明しとくよ」

「え! ? 何で僕が全くわかつてないことがわかつ・・・・・・ちょっと悠介! その哀れむような目はやめてよ! 」

明久のバカさは限界が見えん。

「で、明久

「ん?」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告してこい」

「絶対に嫌だ」

「心配ないぞ明久」

「なんでさ悠介? 相手はこの雄一だよ?」

「Bクラスには美少年好きが多いからな」

「そつか。それなら安心だねつ。それじゃ行ってくるよ」

「ああ・・・・・お前の顔の良さがほんの少しでいいから頭にいけばよかつたのに・・・」

「悠介なんか嫌いだつ！」

そのあと明久がボロボロになりながら帰つて来たのは言つまでもない。

「よし、行つてこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『『『サー、イエッサー！』』』

坂本の指示でFクラス軍が一斉に突撃する。ちなみにオレは参加せず、この場で坂本の警護及び次の作戦の準備中だ。

「坂本、あいつらは大丈夫か？」

「問題ないだる。主な対決教科は数学。隊長である姫路は数学は腕輪持ちだ。まず負けることはない」

腕輪とは400点をオーバーすると召喚獣につく装備であり、個々の特殊能力が

ガララッ

誰だ？オレいま説明中だ空氣よめ。

「Bクラスの船橋だ。Fクラスに使者としてクラス間交渉に来た」

Bクラスの使者？なんかの策略か？レベルはそっちが上なんだから正攻法でくればいいのになんでもた・・・・

「・・・・・内容はなんだ？」

「四時までに決着がつかなかつたら明日に持ち越し？・・・・姫路頼りのFクラスからしたら姫路への負担を減らせるこの協定は悪い話じゃない。でもそれでBクラスにはどんな利点がある？気は抜かないにしても最下位クラスとの試合戦争なんて速く終わらせたいはず・・・・なんか嫌な予感がする。

「いいだろう、協定を結ぶ」

「せうか、じやあ調印をするから新校舎の話を教室に来てくれ」

「わかった」

坂本は承諾したか・・・まあ丸々信じているわけではなさそうだが・。  
。

「（坂本、どうするんだ？）罷の可能性も十分あるぞっ。」

「（分かっている。身代わりになる程度の護衛は連れて行くつもりだ。一応お前も来て、俺の護衛にまわってくれ）」

「（わかった）」

。そしてオレたちは新校舎へ向かつ。教室をほとんど空にして・・・

「Fクラスの坂本だ。協定の調印をして来た」

「やつと来たかFクラス代表。不意討ちでも恐れてこないのかと思つたぜ」

Bクラス代表はあの根元恭一なのか?」いつが評判通りの男なら、この協定やはり裏がありそうだ……

「(おい坂本、嫌な予感がするからオレは教室に戻る。ああいう奴は手段を選ばない感じがする)」

坂本の返事も聞かずFクラスの教室に走る。あそこにはFクラス全員の私物があり、それが狙われる可能性があるからだ。

ガラッ!

息を切らしながらFクラスの教室にたどり着き、勢い良くドアを開ける。

「なつ、何だお前!」

予想通りか。たくさんの折られたシャープペンシルや鉛筆が散乱する中、二人組の男が誰かのカバンをあさつていて、手には何か手紙のよつな物を持っている。

「残念だつたな。目的の物はもう手に入れたんだ。おい岡田、これを根元に持つて行け!こいつは俺が片付ける。木村先生!藤沢浩介が物理勝負を申し込みます!」

「え?あつ、はい。承認します。」

「サモン  
試験召喚!」

「ぐつ・・・・・ 試験召喚！」

ちょうど廊下にいた木村先生が立ち会いになる。やつてることが教室破壊なんだから、何も知らせずに廊下に配置させたのだろうか？手紙を持ったやつを追いたいがここで召喚獣をださなければ戦死扱いになつてしまつ。受けて立つしかない。

『Bクラス 藤沢浩介 物理 324点』

三百点台か・・・。やはり木村先生がいたのは偶然じやないな。普通の教科じや全くかなわない点数だ。でも

「へつーー」のオレが物理勝負で負けるか！

「確かにいい点数だ。でも オレには絶対に勝てない

『Fクラス 火坂悠介 物理 427点』

オレの点数が表示されるとともに藤沢の目が見開く。バカめ！物理も超得意科目だ！もちろん400点を越えているので、召喚獣は腕輪をしている。え？ なんでそんな高得点な教科があるのでFクラスかつて？ そんなの決まってるじゃないか・・・。他教科は明久以下だ！

「腕輪持ちだと・・・。そんなバカな・・・」

「どうした、かかつてこないのか？お前が物理が得意なのは相方もしつてんだろ？ならお前への援護に来るのも遅くなる。それにひきかえここはFクラスの教室、五分もすればみんな帰つてくる。囮ま

れる前にオレを倒し……いや、倒された方がいいんじゃないか？」

「だ、黙れ！負けるのはお前だ！食らえ！」

藤沢の召喚獣がオレの召喚獣めがけて突っ込んでくる。こんなに激昂してくれる相手は本当にやりやすい。

『凍結』！

オレが腕輪のキーワードを口にすると召喚獣の周りの召喚フィールドに青い円が広がり、その中にいた藤沢の召喚獣の動きが止まる。

「な、なんだ!? 何が起こって……」

「なんてことはない。腕輪の能力だよ」

オレの腕輪の能力……『凍結』。召喚獣の周りに青い円を発生させ、その円の中にいた敵を凍らせ動けなくする能力だ。発生させる円の大きさは自由で、半径の長さ×10点を消費する。つまり3メートルなら30点消費といった具合だ。そして動けなくなつた敵は・  
・  
・  
・

「殴り放題つてことだ」

がん、がん、がん、がん。

教室に鈍い音が響き、藤沢の召喚獣が消滅す「戦死者は補修！」鉄人早つ！まだ倒して五秒もたつてないよ！あいつも雑魚キャラ特有の捨て台詞とか言いたいんじゃないのか!? ほら！なんか言おうとしてるけど……あーあ……連れて行かれた。

セレ、どうしようか……

「なに……どうしたの悠介！？」

「明久？ 戻ったか。協定の調印に行ってる間に教室が荒らされてな

「うわ……本當だ……でもこれぐらいなら雄一がなんとかしてくれるよ」

「シャープや鉛筆なら大丈夫だろう……。でも厄介なことをされた……」

あの手紙が……あいつらがあさつてた鞄は……。それに手紙のデザインの感じ……。

「姫路のラブレターが盗まれた」

## 第十一問

「明久……姫路のラブレターが盗まれた」

「えつーそ、それってどういうこと…？」

「さつきBクラスの奴らが来て姫路の鞆をあさつて、手紙みたいな物を持つていったんだ。外側のプリントから察するにラブレターで間違いないと思う……。姫路を封じればFクラスなんて敵じゃないからな」

「そんな……くそ…」

「おい待て明久！今行つても意味がない！返り討ちにあうだけだ！オレたちにできる」とは」の試召戦争に勝つて根元から取り返しかないんだ！」

「……そうだね。今熱くなつてもしようがない。試召戦争に勝つことを考えるよ……」

「だが姫路は弱みを握られる以上戦闘には参加できない。姫路になると坂本ともう一度相談して作戦を練り直すしかないな」

「俺を呼んだか？」

「あ、雄一」

「坂本、いいところに来た。もつ4時になるから戦争は終わりだろう。これから作戦について話さないといけないんだ」

「なんだ? 何があった?」

「姫路さんを戦線からはずしてほしいんだ」

「……なんでだ?」

「理由は言えん。とにかく頼む」

「そうか……だが作戦に変更はない。だから姫路のやる予定だった任務をお前らがやれ」

「姫路の任務か?」

「ああ、できるか?」

「うんー…せつてみる、いやせつてみせるー!」

「それじゃあ頼んだ。他に何かあるか?」

「うん。根元君の制服が欲しいんだ」

「……お前に何があつたんだ?」

「えつ? あ、あつ!」

「……たく今はシリアスな場面だろうが。坂本、理由は聞くな。  
オレからも頼む」

「まあ……それはなんとかしてやろう」

本当に明久は爆弾発言を繰り返すよな……。自分が言つこと  
をちゃんと確認してから言わないと、やのうす「じ」て噂が立ちそう  
だ。

「…………（トントン）」

「お、ムツツリーーか。何か変わつたことはあつたか？」

Fクラスの諜報係であるムツツリーーが報告にきていた。お前のそ  
の気配の消しかたは本当に怖い。

「…………じクラスが怪しい」

「なに？じクラスだと？」

「大方漁夫の利を狙つつもりだろ？。いやらしい連中だ」

CクラスがFとBの勝つ方に勝負を仕掛けるつもりなのか？でか  
坂本、いやらしい連中、だなんて他人に言つことはお前にはできな  
い。

「じクラスと協定を結ぶか。Dクラスに攻めさせるとか言つて」

「それに、じクラスは僕らがBクラスに勝つなんて思つていね  
るうしね」

「よし、それじゃじクラスに行くぞ。秀吉、お前は別の作戦のこと  
もあるから教室に戻つてくれ」

「ん、雄一がやつぱつならやつするところよのうかの」

秀吉を何の作戦に使うんだらうへ。秀吉には悪いがオレの秀吉イメージは

ジは

1、美少年

2、Fクラスの残りすくない常識人

ぐらいのものだ。まあ演劇部のホープと呼ばれるぐらいだから演技が関係ある作戦かもしれない。なんて考えていると、

「吉井。アンタの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど。  
どうしてくれんのよ」

島田と須川が帰ってきた。お前らはさつきの試合戦争で何をしてきたんだ？返り血なんてそういう日常会話で出でくる単語じゃないぞ。・  
・  
・

「それって吉井が悪いのか？」

オレもそう思つ。

「あ、島田さんに須川君。ちよつとよかつた」

明久、お前の田の前で返り血とか言つてる奴に笑顔で話しかけるのはおかしい。あと島田とは縁を切つた方が身のためだと思つ。まあ人数は多い方がいいが。

ガラツ

「Fクラスの坂本雄一だ。このクラスの代表は？」

坂本が教室のドアを開くなりそう。ひゃつ。

「私だけど、何か用かしら?」

するとオレたちの前に長い黒髪の女子生徒が歩いてくる。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか?」

「クラス間交渉?ふうん・・・」

「ん・・・なんかおかしい。この違和感・・・

「どうしようか根元クン?」

根元?このシユチュエーションで根元つてことは・・・あーはいは  
い。

「当然きやつ「逃げるぞ坂本!教室まで走れ!」おい!人の話は最  
後まで聞け!」

「ね、根元君!なんでこんなところ?」

「明久!今はつべこべ言つてる場合じゃない!とにかく逃げるぞ!・

このままじゃ協定違反と言われて攻撃を仕掛けられる。もともと戦  
力が違うし、雄一がやられたらこれでオレたちの負けになってしま  
う!」

「長谷川先生!Bクラス芳野がFクラス代表に

」

「させるか！」Fクラス須川が受けて立つ！試験召喚！<sup>サモン</sup>」

「すまん須川！ここはたのんだ！」

須川が身代わりになる。須川にはすまないがここは須川を置いて逃げるしかない。

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

背後から根元の声と複数の足音が響く。音から察するに四人・・・。  
・姫路は試験戦で数学で戦つてたから数学の点数は下がってるだろうから、坂本以外の全員で戦つても勝ち目は薄い。

「はあ、ふう・・・」

「姫路、大丈夫か？」

やつぱり体力的にきついか・・・。

「あ、あの、さ、先に・・・行つて、ください・・・」

姫路が言う。しかし「」で姫路を失えばFクラスは負けるだろう。  
ここは・・・

「雄一！」

「なんだ明久！」

「」は僕が引き受けた！雄一は姫路さんを連れて逃げて！』

あ～あ。オレが言おうとしたセリフを……まあ姫路からしたら明久が言つた方がいいか。さて……オレも……あれ? この前のテスト数学は何点だったっけ? テストの結果の用紙は……あつた。

『火坂悠介 数学 24点』

「明久、オレはバスだ! 足手まといになる自信しかない!」

「え? あ、うん別にいいけど」

「じゃあウチがのこるわ。数学は得意だし……」

「悪いーー!」には頼んだ!」

明久と島田を置いて逃げる。え? 女の子を身代わりにして恥ずかしくないかって? 残念ながら島田はオレの『女の子』カテーテロリーに入つてない。オレの知つてる女の子はあんな凶暴性はない。

「ちょっと火坂? ウチなんかアンタを殺さなきやいけないような気がするんだけど?」

「気のせいだ!」

ふう、マジでびびった。この学園、人の心を読む奴が多い気がする。

「坂本、あいつらは大丈夫なのか？」

置き去りにしたオレが『いつ』とはないが、心配ついでに元気の姉路をみて思わず坂本に『いつ』。

「 もううんだ。他の奴らなれどもかく、あいつならなんとかなる」

「？ なぜそいつ思う？」

「勉強ですべてが決まるわけじゃないだろ？」

「まあ、それはそうだが・・・」

あいつが不安なのはむしろ勉強以外のところもあるんだがな・・・。

「あいつもだてに『観察処分者』

なんて呼ばれてないひとだ」

「あー、疲れたー」

「よ、吉井君！無事だったんですね！」

戸を開けて明久と島田が帰ってきた。すういな、ビリヤリ生還し……

「うふ。これくらいなんともいだあつー」

どうやら明久はまた島田の機嫌をそこねたようだ……。そしていぐらなんでも、好きな奴の爪先を踏み抜く島田は一度と『女の子』cate、「リーに入れる気はない。

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも……」

「（キツー）」

「あ、いや、美波」

ん、なんか名前呼びをしてるらしい。なんで名前呼びになつた後やつとりがこれなんだろ……。

「あ、そうだ。悠介、ちょっといい？」

「ん? なんだ?」

明久に呼ばれ廊下に出る。

「姫路さんのことだけど、なんで僕に相談したの?」

ん~姫路がお前を好きだから、なんて言えないしなあ。

「お前が適役だと思ったからだ」

「僕が? でも雄一の方がよかつたんじゃないの?」

「何でだ?」

「え? だって、その、姫路さんが・・・」

「お前もしかして姫路が坂本を好きとか思つてゐんじやないだらうな?」

「え? 違つの?」

「・・・・いや、お前がやつ思つてゐなうそれで良こ・・・・

オレの田の前で最強のバカはまだ頭の上にマーカを浮かべていた。

## 第十一問

「昨日言っていた作戦を実行する。」

Bクラスとの試合戦争一日田の朝、坂本がオレたちにそり告げる。

「作戦? でも開始時間はまだだよ?」

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

CクラスはBクラスとFクラスの漁夫の利を狙つており、やはり手をうつておく必要がある。

「あ、なるほど。それで何をするの?」

「秀吉にこれ着てもいい?」

坂本がそう言って鞄から取り出したのは女子の制服。どうやって手に入れたかはさておき秀吉に女子の制服を着せるらしく。

「それは別にかまわんが、ワシが女装してどうするのじゃ?..」

「え? かまわないの? それは男としてどうなの?」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装つてもいい?」

秀吉の姉はそつくりなつたにAクラスの生徒であるうじく、AクラスとしてCクラスに圧力をかけるつもりらしい。

「と、いうわけで秀吉。準備をしてくれ。」

「「ひ、つむ・・・・・」

坂本から着替えを受け取り、生着替えを始める秀吉。あれ?男の着替えなのになんでこんな見切やいけないような感じがするんだろつ・・。隣で明久は顔を赤く染めており、ムツツリーーはすゞい速さでシャツターを切つている。

「よし、着替え終わつたぞい。ん?みんなどうしたのじゃ?..」

「さあな、俺にもよくわからん」

「おかしな連中じやの「」

おかしいのはお前の容姿だ!」

「んじゅや、じクラスに行くぞ」

「「つむ」

「あ、ちょっと待つて。僕も行くよ」

「オレも行く」

オレに秀吉、明久、坂本の四人でじクラスへ向かう。しかし秀吉の女装姿になんか引っ掛かるものを感じる。オレは女装姿なんて初めて見たし、そつくりとか言う姉の方も見たことはないはずだが・・・。

「さて、ここからは一人で頼むぞ、秀吉」

まあ△クラスの使者に成り済ます以上、オレたちがついていっては怪しまれるだらう。ここからは秀吉一人ということになる。

「あまり気がすすまんのう・・・・・・

そりゃあ姉のふりをして他人を騙すんだ、いい氣はしないだらう。

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して△クラスに敵意を抱かせる必要があるんだ。お前ならできる」

「はあ、あまり期待はせんでくれよ・・・・・・

気が重そうな秀吉。

「（おい、坂本。秀吉は大丈夫か？あのテンションなら失敗するかもしれないぞ？）」

「（大丈夫だ。秀吉を信じる）」

「（信じじゆつていつたつてな・・・・・）」

秀吉がため息をつきながら△クラスの教室に向かう。本当に大丈夫だろうか？

ガラツ！

「静かにしなさいーこの薄汚い豚どもー」

心配したオレがバカだつた。なんだその切り替わり様は？てかお前の姉貴ってそんなこと普通に言つの？

「な、なによあんた！」

「話しかけないで！豚臭いわ！」

自分から話しかけてそれはないだろ・・・

「アンタ、Aクラスの木下ね！ちょっとと点数いいからつていい気になつてるんじゃないわよ！何の用よ！」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女たちなんて豚小屋で充分だわ！」

「なつー間に事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですつて！？」

どうやらCクラス代表の中では豚小屋=Fクラスらしい。

「手が穢れてしまつから本当はいやだけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送つてあげようかと思うの」

ムカつくものいいだな・・・。オレがCクラス代表だつたら秀吉の顔に五寸釘を打ち込んでるところだ。

「ちょうど試召戦争の準備もしてるみたいだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女たちを始末してあげるから！」

そう言い残しCクラスの教室を出でくる秀吉。なんだそのすつきり

とした顔は？

「いやでよかつたかのひへ。」

「ああ。素晴らしい仕事だった。」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

まあたしかにいい仕事をしたと思うがお前はそれでいいのか？なんでおれはなにもやってないのにこんな罪悪感を感じないといけないんだうひ・・・・。

「作戦も上手くこつたことだし、俺たちはBクラス戦の準備を始めらるわ」

「お、おひ

「ドアを上手くつかうんじゃ！ 戰線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛び、Bクラスの教室付近で戦闘が繰り替えされる。坂本は、『敵を教室内に閉じこめる』という指示を出している。元々の作戦は姫路が根本の近くの敵を引きつけ、室外機を破壊させることで開けつ放しになつた窓からムツツリーーと大島先生が突入。彼の最強科目であるといつ保健体育で根本をしとめるらしい。しかし姫路は昨日からの予定通り今日は戦争にさんかしていないので、オレたちが根元の親衛隊を引き離さなければならない。

「さて明久、どうするんだ？」

「うん、僕もずっと考えてたんだけど、今いい作戦を思い付いたよ」

「ほひ、どんなだ？」

「まず、

「

「・・・お前本当にやるのか？」

「うん。 悠介から見たらバカでしうがない作戦かもしれないけど、僕にはこれぐらいしかできないしね」

悠介たちが話しているのは放課後の誰もいないロクラスの教室。Bクラスの隣に位置する教室である。

「それじゃあ遠藤先生、お願ひします」

遠藤先生の英語のフィールドが展開される。

「試<sup>サモソ</sup>獣召喚！」

明久の物理干涉能力を持つた召喚獣が現れる。そして

「行けッ！」

「ドンッ！」

「ぐつー！」

明久の召喚獣が壁を思いつきり殴る。当然フィードバックもついて

いるので、痛みのあまり明久がうめき声をあげる。全ての痛みが帰るわけではないが、鉄筋コンクリートの壁を殴る痛みは半端なものではない。

「ドンッ！」

「ぐわっ！..」

それでも構うことなく明久は壁を殴り続ける。しかし明久の拳からはもう血が流れていった。隣で悠介はまじまじとその拳を見つめる。

「（なんで・・・・・・・・）」

「ドンッ！」

「（なんでそんなに他人のために頑張れるんだ？・・・・・）」

「ドンッ！」

「（お前はそのラブレターが坂本当てだとか思つてんだろう？）」

「ぐわっ！..」

「（お前がラブレターを取り返してもお前の得する」となんて一つもない。お前がつらい思いをするかもしねい。なのに・・・・）」

「だあーーーっしゃあーーー！」

「（なんでお前もあいつみたいに簡単に自分を犠牲にするんだよーーー？）

「

ドゴォッ！

遂に壁が崩れ、中にあるBクラスの生徒数人が驚いたようにこわちを見る。その中に、

「くたばれ、根元恭一ーいーつ！」

Bクラス代表根元恭一の姿もあつた。

「遠藤先生！Fクラス火坂悠介が」

「Bクラス山本が受けます！試験召喚！」

悠介が根元に直接勝負を仕掛けようとするが、近くの近衛部隊に阻まれる。

「は、ははっ！驚かせやがってーお前らの奇襲は失敗だ！」

もう安全だと思ったのか、明久たちを笑う根元。しかし彼は窓から入ってきた二つの人影に気づいてはいなかつた。

「残念、チェックメイトだ根元」

ダンツ、ダンツ！

「・・・Fクラス、土屋康太」

「あ、キサマ・・・・・・」

試験召

「…………Bクラス根元恭一に保健体育勝負を申し込む。

喚！」

ムツツリーーの召喚獣が根元の召喚獣を一撃で切り捨てる。

こりしてBクラス戦は終結した。

## 第十一問（後書き）

どうも、作者です。

悠介は明久の行動が理解出来ない様子。他人のために頑張れる明久に悠介は何を感じていくんでしょうか？

## 第十一話（前書き）

どうも、作者です。

駅伝見ながら書きました。

今回は短めです。

## 第十一話

アレ? なにこれ、夢?

いや、夢じゃない。ちゃんと痛い。肘の関節あたりが・・・。

アレ? オレ、なんでこんなことになつてんだ?

十 分 前

「あれ、悠介もう帰るの？」

「ああ、バイトがあるんでな」

Bクラス戦が終結し、坂本がなにやら根本を女装させようとした始めたのを見て、オレは気分が悪くなり帰ることにした。もちろんバイトも本當にあるし、一人暮らしであるオレにとってバイトは貴重な収入源であるため休むことはできない。

「そつか。じゃあまた明日」

「おう」

明久と別れ教室をでる。「…………」口間はいろんなことがあって疲れたな……。まああいつらと同じクラスにいる限り平穀な日々なんて望む方が無理という物だらう。

「あれ、秀吉? お前まだ女装してたのか?」

廊下で女子の制服を着ている秀吉に会つ。ここつは本当に男と見られたいのか?

「何言つてんのよアンタ? アタシは木下優子よー!」

「え? あつ、すまん」

どうやら姉の方だったようだ。まったく胸が無いから秀吉と見間違

え・・・・

「今なにかアタシに失礼な」と考えてないかしら?」

「いえ、全然」

また心読まれたよ・・・・。なんで一日一回ペースで心よまれるんだ。

「勘違いして悪かったな。じゃつ」

ガシイツ！

ん？腕がつかまれた。なんで女のはずなのに腕がびくともしないんだろう？最近忙しいオレの第六感も危険を告げているが、逃げようにも足が震えて動かない。

「『まだ』つてどうこいつとかしきりへ詳しく述べてもうらぶると嬉しいな」

「オレは腕の力を弱めてくれると嬉しいかな・・・」

オレの腕は既にミシミシといやな音を立てており、このままじゅ腕に新しい関節ができそうな勢いだ。

「あの愚弟はまた女装をしていたの？」

あーやつぱり秀吉つてちょくちょく女装してたんだ・・・。今日も女装にためらいがなかつたからな・・・。

「ねえ、教えて？」

やばい、痛みのあまり意識がもつろりとしてきた。オレはここで死ぬのかな・・・・こんな死に方嫌だ・・・・。

そう思いながらもオレはその場で倒れ、意識を手放してしまったのであつた。

「ん・・・」

「悠介？ 気がついたかの？」

「秀吉・・・」

「保健室じや。お主が姉上に関節を決められ氣絶したと聞いたので来てみたのじや」

「うか・・・痛みのあまり氣絶したんだつけ・・・腕は・・・良かった。関節は増えてない。」

「秀吉、お前は大丈夫だったのか？」

「つむ、ワシは姉上の関節技は受けなれておるからね。このとおりじや」

「あ、やつぱせりゃられたんだ。」

「あ、オレバイトが・・・電話しないと」

「バイト先なら俺が連絡しておいた」

そつ言つて入つて来たのは西村教諭。なんで俺のバイト先まで知つてるんだろう・・・。

「そうですか・・・。ありがとうございます。でも先生の顔は氣絶から覚めてそつそつと見るものではないですね」

「お前は失礼といつ言葉を知らんのかー」

お礼を言つたのになんで失礼だなんて言つんだら？

「いてて……悪いな秀吉、こんな時間まで」

「別にいいのじゃ。姉上の方こそすまんのう」

「お前も大変だな……」

ベットから起き、鞄をつかむ。とにかく今田は帰つて早く寝よう、体力が持たない。

「ところで火坂、木下。EクラスはBクラスに勝つたそうじやないか。どうだ? 新しいクラスは」

「楽しくて退屈はせんのう」

「そりゃ、それは良かつたな。火坂はどうなんだ?」

「しようもないバカばっかで疲れます」

「まあお前はそうかもしれないな。学年一のバカもいるクラスだ。だがお前もそのうち慣れていくだろ?」

「あのバカどもに違和感を感じなくなつたらオレはもうおしまいですよ」

そう言いながらオレの頭にはあの学年一のバカの顔が浮かんでいた。あの決着のついた後の笑顔……。手を痛そうにしながらもオレたちに向けた笑顔……。どこかで見えたことのあるような笑顔……。

「なんなんだろ？　・　・　・」

帰りながら一人呟くオレがいた。

## 第十四問（前書き）

いつも、作者です。

別にどうでもいいことですが作者は受験生です（オイ）。

勉強したくないです……（笑）。

## 第十四問

No side

「ふああ・・・・疲れた・・・」

Bクラス戦の翌日、悠介は一人で学校に向かつて歩いていた。今日は朝からAクラス戦のための補給試験があるので、少し早めの登校である。

「（ああ、痛みは引いたけど、まさか夢にまで出でてくるとは・・・）

昨日、優子に気絶するほどの関節技をかけられたショックは大きいようだ、昨日は夢にまで優子が現れ快適な眠りにはならなかつたようである。

「（ん？あれは坂本じゃないか？）」

前方にクラス代表の姿を見つけ、田を向けてみる。

「（ん、この前も見た黒髪の女子生徒と話してら・・・・もしか

して彼女とか？もしそうだつたら明久たちがだまつてなされつだが。  
・・・

そう思つたが、オレには関係ないか、と田を離しそのままFクラスの教室に向かつのであつた。

### 悠介 side

「おまえはみんなに礼を言いたい。不可能と言われながらここまで来れたのは、みんなの協力があつてのことだ。感謝している

「ゆ、雄一」、どうしたのさ。らしくないよ？」

壇上の坂本がFクラス一同に礼を言つと、明久は驚きの声を上げる。確かに今までのやりとりを見てると、明久が坂本に礼を言われる場面なんて想像もできない。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて勉強がすべてじゃないことを、教師どもに見せつけてやるんだ！」

『おおーっ！』

『せうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

みんなの気持ちが教育的におまりよくない理由でまとまっている。やつぱりこの試験召喚システム生徒に悪影響を及ぼしてないか？

「みんなありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと思っている」

ああ、一昨日言つてた対Aクラスの作戦か？しかし何も聞いていないFクラスの面々は案の定驚いており、教室にはざわめきが広がっている。

「一騎打ちをするのは、当然オレと翔子だ」

「バカの雄一が勝てるわけなああつ！？」

危ねえつ！明久めがけて坂本が投擲したカッターが飛んできやがつた！

「次は耳だ」

「僕と雄一は友達とはもつ呼ばないよね？」

「坂本！」

「そうだよ悠介！人に平然とカッター投げるやつになんか言つてやつてよ！」

「明久を狙うならもつとしつかり狙え！危ないんだよ！」

「ちょっとー僕にカッター投げる行為に問題はないの！？」

え？別にない。

「すまんな火坂、お前も一緒に狙つたつもりだつたんだが

「殺す！あいつは殺す！」

「やめるのじや悠介！落ち着くのじやー！」

仕方なくオレは手に持つたカッターをしまづ。

「まあ確かに明久の言う通り翔子は強い。まともにやれば勝ち目はないかもしれない。だがそれはDクラスもBクラスも同じだったろう？まともにやれば俺たちに勝ち目はなかつた」

確かに姫路がいたとはいえ、まったく実力の違う上位クラスに今まで勝ってきたのは他の誰でもない、坂本のおかげだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今みんなにみせてやる」

『おおお——つ！』

まあここまで言われたら坂本を疑う余地はない。坂本に任せてみよう。

「さて、具体的なやり方だが・・・」

坂本の作戦を聞くと、Aクラス代表である霧島翔子は日本史で必ず一つ間違える問題があるらしい。それをねらって小学生レベルの上限ありテストで勝負しAクラス代表を負かす作戦のようだ。え？なんで短く要約したかつて？作者がこの部分を書くのが面倒ならしい。さぼるな！作者！

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんは・・・・その、仲がいいんですね？」

たしかにさつきから坂本は霧島のことを下の名前で呼んでいる。この最下位クラスの代表と、学年主席が友達だとからはあまり想像できません・・・。

「ああ、あいつとは幼なじみだ」

「総員狙え！」

あ、Fクラスが得意の嫌な団結力を發揮した。

「なつー？なぜ明久の号令でみんなが急に上履きを構えるー？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「俺がいったい何をしたとー？」

お前の幼なじみの相手が気にくわないらしいよ。

「遺言はそれだけか？・・・待つんだ須川君、靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

男子高校生四十七人の靴下はどんな味がするんだろうなあ・・・あ、吐き気が。

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりや、まあ。美人だし」

「・・・・・・」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢をとるのー？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げよう

とかのー。』

島田はともかく姫路・・・何がお前をそこまで変えた・・・お前はもう立派なFクラスの一員だよ・・・わゆつなら姫路・・・

「まあまあ落ち着くのじや皆の衆」

秀吉が場を取り持つ。秀吉一Fクラスの時とかいろいろあったけどやつぱり常識人『オレの見方』はお前だけだよー。（泣）

「冷静になつて考えるとよい。相手はあの霧島翔子じゃぞ、男である雄一に興味があるとは思えんじゃねーが」

『ああ・・・やつぱりね』

ああ、あれか？霧島翔子は男ではなく同性愛者で、女の子が好きってこゝう噂があつたな。むしろこんな身近に同性愛者がいることに疑問を持たないお前らがおかし・・・いや、前言撤回。島田を見たら考えが変わった。

「まあとにかく、あいつは一度覚えたことは絶対に忘れない。俺はそれを利用してAクラスに勝つ。そうしたら俺達の机は・・・」

『『『システムデスクだ！』』』



## 第十五問

NO side

「上手く一騎打ちに交渉できるかなあ・・・」

悠介はAクラスの教室の外から、Aクラスへ戦線布告をしにいった雄二たちを見ていた。なぜ教室に入らないかというと・・・

『一騎打ち?』

『ああ。Fクラスは試合戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む』

『・・うーん、何が狙いなの?』

Aクラスの交渉側が木下優子だからであった。昨日彼女に氣絶する程の関節技をかけられ、まだショックが消えてないのである。

「(まさかあいつがいるとはなあ・・・。あいつの姿が見えた瞬間誰にも見えないような速さで逃げしまった・・・。人間ってあんなに速く動けるんだなあ・・・)」

少々自分の限界を超えた動きに驚きを感じている悠介。交渉をしている場からはそれなりに近いので、その場で交渉の内容を聞いている。

「（しかし明久たちは本当に気づいてないな・・・。まその方がありがたいけどさ）」

『ところで、Cクラス戦はどうだった？』

『時間はとられたけど、それだけよ。なんの問題もなし』

『Bクラスと戦う気はあるか？』

『Bクラスって・・・。昨日来ていたあの・・・』

『ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はされなかつたようだが、さてさてどうなることやら・・・』

「（坂本は作戦通りに交渉できるみたいだな・・・。今のところは順調だ。・・・・・てかさあ・・みんなそろそろ気づいていいんじゃないの？一人いなじやん！明らかに！Fクラスの貴重な常識人係が！）」

『それって脅迫？』

『人聞きが悪い、ただのお願いだよ』

「（明久！気付けよ！坂本が根本に見える・・とかそういう風してないでいいから！それについては同意見だけれどもー）」

『うーん、わかつたよ。何を企んでいるか知らないけど、代表が負けるわけないからね』

『え？本当？』

『だって、あんな格好した代表のいるクラスと試合戦争なんて嫌な  
の』

「（秀吉ー）これは思わぬ収穫じゃ・・とか思つてゐる顔はいいから氣づいてーメンバーが一人足りないことにー」

明久と秀吉の心を自覚なしに読みツッコミを送るが彼らは「氣づく」  
となく交渉に耳を傾けている。

「（ちょっと待てよ！オレいくらなんでも）」の小説の主人公だぞ！？なんで主人公がいないのに誰も気づかないんだよ！ここで影薄いキャラつけてどうする気だ作者は！そんなキャラ福原先生で充分だろ！え？常識人キャラも秀吉だけでいい？じゃあオレの存在意義つてなんなんだよ！）

作者は耳を貸さないのであつた。

「（作者ああ―――っ！さつきからの）のナレーターお前かよ！ていうかオリキャラと作者が絡んでどうすんだ！こんな二次創作じやねえだろ！最初らへん話の駄文しか書いてないお前はどこのいつたんだ！」

ガラガラッ

「何してんの悠介・・・・？」

「あ・・・」

悠介 side

「まったく、ドア開けたら悠介が頭抱えてブツブツにか言つてたからびっくりしたよ・・・」

「ああ・・すまんな・・」

オレが自分の存在に悩んでいる間に明久たちはAクラスとの交渉を終わらせたようで、今はFクラスに戻っている途中である。

「なんで教室に入つてこなかつたのさ?」

「いや・・まあこりこりとあつてな・・・はは」

「明久・・・それは聞かんでやつてくれるかのう・・・」

オレの事情を知ってる秀吉がフォローをしてくれる。もうこのクラスじゃ常識人＝苦労人になる流れがありありと見えるよホントに・・・。ああ、オレの台詞の・が占める割合の多いこと・・・。

さて、場面は変わつてAクラス。え？場面がわりが早い？ホントごめんな・・・この作者どう続けるか思いつかなかつたそうだ。

「さて、両者とも準備はよろしいですか？」

Aクラス担任かつ学年主任の高橋女史が生徒たちに声をかける。彼女が今回の立ち会い人だ。

「ああ

「問題ない・・・」

「それでは一人田の方、どうぞ」

「アタシからいくわ」

「うひて前に出てきたのは木下姉。そしてオレが素早く身を隠したのはいつまでもない。」

「Fからはワシが行くのがいい」

わい、Fからは秀吉か・・・。純粋な点数勝負じゃ相手にならないからいかに木下姉の集中力を乱せるかが勝負の鍵に・・・

「ところで、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Hクラスの小山さんって知ってる？」

あ、なんかやばい。

「はて、だれじゃ？」

「じゃあいいわ。その代わりちょっとこいつをあたってくれる？」

「うん~ワシを廊下に連れ出しちゃうのじゃ~。」

秀吉！逃げて！危ない！あの田は危ない！オレに関節技をかけた時もそんな田をしてた！

『姉上、勝負は・・・・・どうしてワシの腕をつかむ?』

『どうしてアタシがCクラスの人たちを勝呼ばわりしていることになつてゐるのかしら?』

『はつはつは。それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測して・・・あ、姉上つ・ちがつ・・・!その関節はそつちに曲がらな・・・』

・』

ガラガラガラ

「秀吉は急用ができたから帰るつてさつ。代わりにそこで隠れてる火坂君出してくれる?」

「だそうだ、火坂。『指名だぞ』

「嫌だ!なんでオレ!?」

「あなたのせいでAクラスの木下の関節技はヒトを氣絶させるほど威力があるつて噂が流れてるよ。さて、どう責任をとつてくれるのがかな?」

「それ噂じゃなくて真実・・・・ああつ・やります・喜んで相手させていただきます!」

危ねえ!また関節増加の危機に晒されるところだった!

「そう、残念。科目はどうするの?」

「か、化学で・・・」

うう・・・うなつたら勝つこの関節美少女を補習室送りにする  
か・・・・・ない！

「それでは、始めて下さい」

「『試験召喚』<sup>サモン</sup>」

## 第十六問（前書き）

今回は話の関係上短めです。

## 第十六問

「サモン試験召喚！」

掛け声と共にオレと木下姉の召喚獣が姿を現す。

『火坂悠介 Fクラス 化学 478点 vs  
木下優子 Aクラス 化学 322点』

「え・・? ちょっと美波、悠介の点数Dクラス戦の時よりさうに上がつてない?」

「100点ぐらい違うわね・・・」

「ちよつとーなによアンタその点数! アンタFクラスでしょ!」

「Fクラス所属でも得意教科と不得意教科ぐらいあるんだよ、Aクラスの優等生さん」

「くつ・・・でもアンタその点数の教科があるのにFクラスつてことは・・・」

「まあそこを突かれると痛いが・・・」

500点に近い点数にその場の全員が驚いた顔をしているが、木下姉に他の教科の点数を見破られてしまった。ああ、皆の視線が痛い。

「やつぱり所詮はFクラスね。叩き潰してやるわ!」

木下姉の召喚獣がランスを構え、オレの召喚獣目掛けて突っ込んで

くる。

「そり焦んなつて・・・よいしょっとー」

オレの召喚獣は柄の部分でランスを受け止める。腕輪を使えば確実に動きを止められる距離だが・・・

一腕輪使って一『動きを止めて』一発殴つてもいいけど、それじゃ面白味に欠けるな・・・。やっぱり最後に点数が減つて動けない相手に思いつきり渾身の一撃をぶちこんでやりたい・・・この前の礼貌も込めてなアハハ。相手も接近戦タイプだし、操作もなれてないみたいだからいけんだろアハハハハにやけが止まらん。

「ねえ美波、悠介がなんか嫌な笑みを浮かべるよう見えるんだけど気のせいかな?」

「かなり嫌な笑顔ね・・・何考えてるのかしら・・・」

オレは私的な理由で腕輪を使わず、嫌な笑みをつかながら鍔迫り合いを続ける。しかしオレの方が点数が高いので、当然鍔迫り合いは優勢になり、ついに木下姉の召喚獣を押しきつた。

「く・・・・うわっ!」

「あんたバカか?点数が自分より高い相手に鍔迫り合いで勝てるわけないだろ。・・・おらつー」

ガキイツ!

槌で殴り付けるがAクラス相当の頑丈な鎧のせいかダメージは点数差のわりに大きくはない。

「命拾いしたな、優等生くん」

「誰が命拾いしたですって！？Fクラス」ときが偉そうな口をきくんじやないわよ！」

「もう怒って突っ込んでくるとな……隙だらけなんだよ」

木下姉召喚獣の動きに合わせて槌を振るう。

ドカッ！

『Aクラス 木下優子 182点』

「そんな…………」

「これで仕上げだ。『凍結』！」

「う、腕輪！？」

オレは腕輪のキーワードを唱え、青い円を発生させる。円の範囲内にいた木下姉の召喚獣は凍ったように動かなくなり、オレの召喚獣はゆっくり近づき、槌を振り上げる。チエックメイト！  
「補習室行きおめでと…………ぐつ…………」

止めを刺そうとした瞬間、オレの視界がいきなりグルグルと回り、オレは頭を抱える。

「あ・・・・・べつてー。」

「ちよ、ちよひじだしたのよアシタ?」

「い、いや・・・なんで・・・も・・・」

なんだ・・・? 視界がボンヤリとしてき・・・・・あ・・・・・意識  
が遠く・・・・・・・・

バタリ

誰かがオレを呼んだよつにも思えたが、オレの思考はそこで途切れ  
た。

## 第十六問（後書き）

どうも、作者です。

主人公はなんか他人と接してゐる時は普通なんですが、自分一人で考  
え事をしてるとなんかおかしくなつていつてますね・・。暴走し  
ます。

## 第十七問（前書き）

いつも、作者です。

今日は自分の文才のなさに泣きたくなりました。・・・。

## 第十七問

「悠介、今日の晩飯は何だと思つ?」

「さあ、知るかそんなもん。だいたい高一の息子に聞くもんじゃねえだろ……。」

「つれないなあ。昔はあんなに嬉しそうに答えてくれたのに」

「この話をしてんだクソ親父。だいたいオレはあいつが作る料理なんて食いたくねえよ」

「そんなこと言つんじやないまつたく。今はお前の母親なんだ、少しは心を開いてみたりどつなんだ?」

「無理な相談だ」

オレの実の母親は一年前に病死している。今は父と再婚した血のつながらない母、つまり継母がオレの家に居座っている。

「何がそつ嫌いなんだ? もつと若てお母さんが良かつたのか?」

「ちげえよ……。」

あいつのオレを見る目を見た日から、オレはあいつを好きになることなんて出来なかつた。あいつがオレを見たときの目……それは新しい息子を見る目でもなければ、家族を見る目でもない。その目には……ありありと『嫌悪』が浮かんでいた。

「なんでなんだろ？」「……」

「ん？なんか言つたか？」

「別に……」

父から顔をそらし右を見ると、公園で子供が元気に遊んでいる。ああ、あのころはなあ……こうして今母がないことも、代わりに嫌な奴が家に居座ることも知らなかつた。まあ知らないくて良かったし、知らない方が幸せだつたらう。

コジン

そのときオレの足に何かが当たつた。立ち止まって見てみると、公園での遊びに使われていたであろうサッカーボールが転がっている。そして車道を挟んだ公園の入り口には、ボールの持ち主らしき男の子がこちらを見つめていた。

「どうやらあの子の物らしいな。悠介、返してやれよ

「わかつてるつて……つてオイ！」

男の子はボールが持つていかれると思ったのか周りも見ずにこっちへ走ってきた。しかしその横にはトランクが……轢かれる！

「危ないっ！」

「親父ッ！？」

親父が男の子の元に突っ込んだ。でもどう見ても助けて逃げるには

時間が無むすざむ！

「オイ！なにやつて

「悠介！」

親父が男の子をオレの方に投げる。

「お前は死んでる」

オレが見たのは・・・何も答えずただ笑つた・・・・・笑つた親父の姿だつた。

ドホン！・・・・

・・・・何やつてんだ?

・・・何がしたかつたんだ？

。 。 。 。 子供は助かってもお前が死んじゃあ意味ないだろ 。 。 。

・・・・・何笑つてんだ?

・・・・・何で笑つたんだ?

・・・・・何が?

「・・・・・何が面白れえんだクソ親父イイーーーつ!

どうしたんだる？・・・・・

火坂君は保健室に運ばれ、対戦相手だったアタシがベッドによこわされた火坂君を看ていことになった。

「・・・・な・・・・も・・・し・・・ん・だ・・・・」

さつきから悪夢でも見てているのか、なにやらブツブツと咳いている。そしてその咳いている顔が・・・・・なんだか・・・とても寂しそうに見えた。

・・・・・悪夢でも見てているなら起こしてあげた方がいいかな・・・・・

そう思つて振り動かそうと手を伸ばしたとき、突然火坂君がムクリと起きた。ふと顔を見ると、田にはうつすら涙が浮かんでいる。

「あ・・・・気がついた？・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

火坂君は何も喋らず、一人にした方がいいかと立ち上がらうとしたとき、

「なあ・・・・・・」

「え？ …… 何かしら……？」

「他人を助ける事つていいことだと思つか？」

「え？ …… そりやまあいいことだと思つかど……」

「それで自分が犠牲になつてもか？」

「え？ ……」

「オレの父親…………半年前に交通事故で死んだんだ……」

「…………」

「近くでトラックに轢かれそうになつた子供を助けてな……」

「…………」

「別に親父が間違つたことをしたとは思つてない。親父死ななれば、子供が死んでいたとは思う」

「…………」

「でもな……ムカつくんだよ…………」

「…………何が…………？」

「…………あの野郎、死ぬほんの直前にこっち見て笑いやがつたんだ……。何がそうおもしれえんだよ！ そんなに死ぬのが嬉しい

のかよ！残されるオレはビックリのまいかよ……」

「…………」

「オレにはわからなかつた。なぜそんな簡単に他人を助けて死ねるのか。なぜ親父は笑つたのか。なんで……そんなに簡単にオレの前から消えてしまえるのか……」

「…………」

「アンタはビックリのまいかよ？」

「…………アタシにだつてわかんないわよ…………。アナタのお父さんには…………彼には何か…………護りたいモノがあつたんじゃないかしら…………」

「…………」

「…………自分の命より大切なモノが…………」

「…………やつぱりわかんねえな…………」

「アタシだつてよくわかんないわよ…………急にそんなの聞かれたつて。…………ねえ…………なんでアタシに話したの？」

「…………特に理由はないかな。…………今すぐ誰かに話さないと不安で押し潰されそうだった。…………そして目覚めて最初に会つたのがアンタだつた。それだけだ」

「…………そう」

「変に重い話して悪かつたな。忘れてくれ……。ラスにもどりづけ……。」

「ええ……。」

## 第十八問

はあ・・・・赤の他人にいきなり自分の過去を暴露してしまった・・。

木下姉と一緒にAクラスに戻りながら、オレはさつきまでの行動を後悔していた。

やつぱりまだ自分の中で整理がついてないのか・・・。でも木下姉に話したことで楽になつたのも確かか・・・うん、気にしない方向でいいや。

「おう坂本、戦況はどうだ?」

「火坂か? お前・・・・」

「あー、オレは大丈夫だ。気にすんな。それよりどうなつてるんだ?<sup>?</sup>」

「そうか・・・今は明久<sup>バカ</sup>が負けて一敗一分けになつたところだ

「え? オレの試合は引き分けなのか?」

「まあどう見てもお前の完全勝利だつたからな・・・高橋女史も考慮してくれたんだろ」

「そうか・・・悪いなホント」

「気にはすんな、本番はこいつからだ」

どうやら坂本はここからでも勝利に持ち込める作戦らしい。まあムツツリーーと姫路がいるわけだし・・・。

「雄」、それは僕は計算に入れてないってこと?」

「おひ明久、どんな死に様だった?」

「悠介も僕が負けた」とは前提にしてるんだね?心配した僕の優しい気持ちを返せ!」

「まあまあそり怒るな。実際に負けたんだろう?」

「うん・・・まあね。でも次はムツツリーーーだし大丈夫だよ

「では三戦目を戦う人は、前に出てきて下せ!」

「・・・・・(スック)」

高橋女史の声に我らが寡黙なる性識者、ムツツリーーーが立ち上がる。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからはショートヘアのボーイッシュな女の子が出てきた。なんか見たこと無い人だな・・・。

「一年の終わりに1 Eに転入してきた工藤愛子です。よろしくね

「あれ? 1 Eって言つたら姫路さんと悠介も同じクラスじゃない? どんな子なの?」

「私は面識ぐらいしか・・・・・」

「そつか、じゃあ悠介はしつてる?」

「あつ、明久君、それは・・・」

「悪いいな明久、オレは去年は後半の半年間学校出でないんだ」

「え? なん・・・ 聞かないほうが・・・?」

「いや、オレはかまわないが今話すよつな話じゃないからさ・・・」

去年親父が死に、継母が家を出でていってからオレは学校に通つていなかつた。もともと独り暮らしをしながら学校に通えるはずがないし、オレも学校はやめて一人で生きていくつもりだつた。もしそのままそうしていたら、オレは今こうして「コイツらと一緒に戦うこともなかつたんだろうな・・・・・ 今となつては『あの人』に感謝すべき・・・・・ かはまだわからないか。

「教科はどうしますか?」

「・・・・・ 保健体育」

「キミ、土屋君だつけ? 保健体育が得意なんだつてね? でもボクもかなり得意なんだ。キミと違つて、実技でね」

あれ? 保健体育の実技つていうと・・・・・ 変な妄想をしてしまうオレがおかしいんだつけ?

「そつちのキミ、吉井君だつけ? 勉強苦手そつだし、保健体育でよかつたらボクが教えてあげようか? もちろん実技で

あ、やっぱそつちの意味であつてるんだ?

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ。」

「わづですー。永遠に必要ありませんー。」

「・・・・・・・・・・・・」

「ああ・・・明久、そんな哀しい顔をしないでくれ・・・・・」  
「までも哀しくなるから・・・・・。」

「わづちの火坂君はビリーボクと保健体育の勉強したくない? 実技で」

「うわ、まさかの」猛烈なバッハがひびいて受けたる  
べきだわづか?

「ちよつー愛子ー。何こいつてんのよー。あんなの愛子の好きなタイプじ  
やないでしょー!」

「・・・・・・・・・・・・」

「ああ、明久がどうこう気持ちだったのかわかった・・・・・わかりた  
くなかった・・・・え? 泣いてんのかって? そんなこと聞くなよ・・・  
・察してくれ・・・・・。」

「あちやー、あの子は優子の管轄だったか。それじゃあ仕方ない  
なあ

「ちょっと、別にそういうわけじゃ……」

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はーい。試験召喚<sup>サヨン</sup>つと」

「…………試験召喚<sup>サヨン</sup>」

以前も見た一振りの小太刀を構えるムツツリーーーの召喚獣に、工藤のセーラー服をきて巨大な斧を持った召喚獣が対峙する。やつぱりAクラスは皆いい武器持つてていいなあ。オレもできれば刃物がよかつたかも……。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーーーくん！」

工藤の召喚獣が腕輪を光らせながら、電光をまとった斧でムツツリーーーの召喚獣を斬りつけた、その瞬間。

「…………加速」

「…………え？」

ムツツリーーーの召喚獣の腕輪が光り、召喚獣の姿がブレる。そして、

「…………加速、終了」

工藤の召喚獣は一瞬で切り刻まれ、倒されていた。

『Aクラス 工藤愛子 保健体育 446点  
Fクラス 土屋康太 保健体育 572点』

つよ・・・・・学年首席の平均点を軽く越えるぞ?・・・・・彼の性に対する知的好奇心は計り知れない・・・・・。

「これで一対一ですね。次の方は?」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

さて、Fクラスのエースである姫路瑞希が前に出ていく。

「それなら僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席」

んー、やつぱりAクラスからは久保利光か。もともと学年3位の実力だが、今回は科目の選択権が向こうにある以上、姫路が負ける可能性が科目によって出てくる。坂本もここは姫路頼みなみみたいだな・・・頑張れよ・・・姫路!

「科目はどうしますか?」

「総合科目でお願いします」

総合科目か・・・そこまで点数に変わりはないはず・・・・・厳しい戦いになりそうか?

「それでは・・・・・」

『Aクラス	久保利光	総合科目	3997点	VS
Fクラス	姫路瑞希	総合科目	4409点	』

「何だと・・・」

オレは思わず驚きの声をあげていた。もともと同じぐらいだった点数を400点も離すなんて並大抵のことじゃない。しかも姫路はもともとすべての教科の点数が300点台・・・オレや明久たちが400点上昇のとでは話が違う・・・。

「ぐつ・ぐつ・ぐつ・ぐつ・姫路さん、びつやつてそんなに強くなつたんだ・・・?」

「・・・私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張るんです」

人の為に頑張れるFクラスが好き・・・人の為に・・・かあ。オレもそうなれるんだろうか・・・人の為に頑張れる人に・・・。

「最後の一人、どうぞ」

「・・・はい」

「おう」

そして最後の一戦。今のところ一勝一敗一分だが、勝利数が並んだ場合、大将戦に勝利したクラスの勝ちになるらしい。だからこの勝

負、勝つか引き分けで勝ちということになる。つまり坂本が100点を取った場合、Fクラスの勝利になるということだ。こんな有利な勝負はないだろう。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

坂本が作戦通りの教科を指定する。

「坂本！後は頼んだぞ！」

オレの声が聞こえたのか、坂本は親指を立て視聴覚室に向かった・・・

『日本史勝負 限定テスト 百点満点』

『Aクラス 霧島翔子 97点』

『Fクラス 坂本雄二 53点』

え？なんでナイフを握りしめてるかって？目的は一つや・・・。

「三対一でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだオレたちに高橋先生が告げる。  
高橋先生・・・そんなことはわかつてゐるよ・・・。オレたちはそんなことを聞きに来たわけじゃない。オレたちは・・・。

「・・・雄一、私の勝ち」

「・・・殺せ」

そう、坂本雄一の抹殺。ただそれだけだ・・・。

「良じに覺悟だ、殺してやるー歯をくいしばれー」

「神に祈る間をやひつ・・・」

「吉井君、落ち着いてくださいー」

「ちょっと火坂君ー落ち着いてまずそのナイフをしまいなさいー」

「くつ、邪魔しないで！姫路さん！」

「木下姉、邪魔をするな・・・」こいつは殺さなきゃいけないんだ

「アキ、火坂、落ち着きなさいー。アンタたちなら30点も取れないでしようがー！」

「「それについては否定しない！」」

オレと明久の声がきれいにハモる。

「それなら坂本君を責めるんじゃないわよー。」

「くつ、止めるな木下姉！」こいつは生かして返すわけにはいかないんだ！」

「あら、アタシの言つ」とが聞けないの？」

「え？・・あ・・ちよつ・・」

「ちよーっと廊下にきてくれるかしら？」

「・・・・・はい」

さて、オレが恥も外聞もなく大絶叫をあげAクラスに戻つて来たと  
あ、

「・・・・雄二・・約束」

「・・・・・（カチヤカチヤカチヤ）！」

「ん？ なんだ約束つて？ ムツツリーーーは何してんだ？」

全く話が読めないので、霧島の言つ約束と、ムツツリーーーの慌ただ  
しい撮影準備の理由を明久に問う。

「あれ？ そつゝいえば悠介はいなかつたんだっけ？」

「おお、理由はさつきのを見ればわかるだろ？」

さつきの血の惨劇を・・・。

「まあね・・・。あ、それで約束つていつのはね、霧島さんが僕た  
ちに勝つたら一つ霧島さんの言つ」ときかなきやならないんだ

「ふーん・・・・」

ああ、それで百合を期待してゐることか？ でもまだ霧島が同性愛  
者だと決まつたわけじゃ・・・。

「・・・・雄二、私と付き合つて

ほらな、霧島は坂本が好きな…………って、え！？

「やつぱりな、まだ諦めてなかつたのかお前」

「…………私はあきらめない。ずっと雄一のことが好き」

「…………拒否権は？」

「…………ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やつぱりこの約束はなかつたこと……」

ぐいっ、つかつかつか。

180はありそな坂本が首根っこをつかまれて連れていかれた…………  
。どんな握力及び腕力トレーニングをしてるんだろう…………。

「さて、Fクラスの皆、今から我がFクラスの補習についての説明  
をしようか？」

後ろから突然鉄人が来て意味不明なことを言い出した。は？我がF  
クラス？どゆー」と？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、担任が福原先生から俺に変わるそつだ。これから一年、死にものぐるいで勉強ができるぞ」

「…………なにいっ……？」

「先生！それはあんまりです！そんなことをしたら、ただでさえ名脇役の臭いがする福原先生がもうほほモブキャラのような存在になつてしまします！」

「火坂、お前の心配どこのはそこなのか？・・・まあいい、とりあえず明日からは授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

「は！しまった！補習が増えるんだつた！」

「さあ～て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束どおりクレープでも食べにいきましょうか？」

「え？ 美波、それは週末って話じや・・・」

「だ、ダメです！ 吉井君は私と一緒に映画を見にいくんですよ！」

「ええつー？ 姫路さん！ それは話題にすら上がつてないよー？」

はあ・・・明久は今月どうやって生きていいくんだろう？ まったく・・・そんなに幸せな状況にいるんだから食費の心配なんて今はするなよ・・・さて、一人者は一人寂しく、そして自由一人の時間を過ごしそ・・・

「そりいえば火坂君？ アタシの悪い噂が校内に広がった件、あれはどう落とし前をつける気なの？」

・・・・・え？

「今ならもう一度関節技フルコースか、アタシにクレープを奢るか選ばせてあげる」

「・・・・・ 奢らせていただきます」

金を選ぶか命を選ぶかみたいな選択指だろ・・・。

「こ、西村先生！ 明日からは言わば、補習は今日からやりましょ  
う！ 思い立つたが仏滅です！」

「バカ、明久。 それは吉日だ。 西村先生！ オレからもお願ひします  
！ 今なら24時間ぶつ通して勉強ができる気がします！」

「うーん、お前らにやる気がでたのは嬉しいが・・・」

「先生、先生がそんなにやついた顔なんてしてると普通に気持ち悪い  
ないです」

「お前はなぜ俺に対してだけそんな辛辣なんだ！ ・・・まあいい、  
今日は一人とも存分に遊べ。 無理することはない」

「おのれ鉄人！ 僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！ こうなつ  
たら卒業式には伝説の木下で釘バットを持つておまえを待つ！」

「それじゃあオレは桜の花咲く新学期、お前を登校早々罵倒してや  
るー！」

「斬新な告白だなオイ。 そして火坂、お前のそれは実行済みだろ？  
が

え？ ・・・ あ、ホントだ。

「アキ！」こんな時だけやる気を見せて逃げようつたって、やつまいかないからね！」

「吉井君ーその前に私と映画ですっー。」

「火坂君？アタシから逃げよつとしても無題だからね？」

くわ・・・回避は無理か。まあ今日はいきなり重い話もしちゃったし、足りないとは思つけどその詫びだと思えれば・・・いいかな。ウン。

「やつぱりもひ一回ぐらこ技かけた方がいいかしら・・・」

・・・・・とにかく、明久もオレも坂本も、今日は安らかには過ぐせなやうなことだけはわかつた。

## 第十九問 オレと休日とお隣さん 前編

「…………ん……朝か」

新学期が始まって最初の週末、オレは様々なことがあったこの週の週末を思いつきり家で休むことに決めていた。せめて土日くらい休まないとあのクラスでは生きていけない……だがオレをそこまで憔悴させるクラスにオレは入ってしまったのだ。入ってしまった以上はそこで生きていくしかないだろう。

「朝飯どうしよう……もう一回寝ようか?」

そういうえば最近親父が死んだ時の夢を見ることが極端に少なくなつた。やはり誰かに言つてしまつたことがオレを楽にしてんのかな……でもいきなり赤の他人にあのことを話したのはまずかつたか?……迷惑だつたかも知れないな。なんかそのうち埋め合わせをしないと。

「今の時間は……と、まだ九時か、どうせ休みなんだし、今日は寝よ」「ドン!」……へ?」

「…………」

「なんだこの音?・・・ああ、隣の住人か・・・つたぐ、人の貴重な休日をなんだと思つて「ドン!」るつせえなオイ!」

おつとついつい口調が変わつてしまつた。これは小説なんだから誰がしゃべつてるかわかりやすいように口調はあまり変えちゃいけない。今は一人だからいいけどさつきの口調じや坂本と被る……。

「・・・苦情でも言つてくるか？」

オレは起きたままの格好で隣の部屋に向かう。え？そのまままでいいのかつて？いいんだよ別に。どうせこんな時間からバタバタやつてる奴なんて変なおつさんに決まって・・・・

「ハア・・・ハア・・・」

あれ？おっさんだ。いや正確言つとおっさんがオレの隣の住人の部屋を、ドアの隣の窓から息を荒くして覗いていた。・・・これはあれですか？いわゆる何？ストーキングを嗜む方ですか？変質者とか呼ばれる人たちの類ですか？

「オイ・・・あんたそこで何やつてんだ？」

「えつ？あつ！これは違・・・」

「あつ、ちょつ、待てよ・・・」

オレが声をかけると、変質者Aは後ろを向いて逃げていった。追いかけて変質者Aは変質者BとCを呼んだ！・・・とかそういう感じになつても嫌だし、ここは気にしない方向でいこう。それよりオレの用があるのはこの部屋の住人だよ！人の睡眠を邪魔しやがつて！

ドンドン！

このアパートにはベルがないので、ドアを思いつきり叩く。・・・早く出てこいや・・・と思つた次の瞬間、

シユガツ！

ドアの内側からナイフが突きしてきた。え？・・・・ナイフ？いやいやいや！おかしい！オレは朝起きたら隣の部屋の物音がうるさかつたから苦情を言いに来た。そしてドアを叩いたら・・・ナイフ・え？なにこれ、入つていいよっていつサインなの？そんな普通の返答でナイフ使う？

ガチャツ

「ああ、あの人じやなかつたんだ。いきなりナイフ投げてごめんね？」

そう言つて出てきたのは・・・背の小さい女の子だった。パツチリとした目に栗色の髪をベリー・ショートにしている。見かけは結構かわいい方に入るんだもつた・・・つていまはそれどこりじやねえ！

「こやいやいやー！」めんじやねえよー。ついかいぐら木製の扉でもこの厚毛のドアを貫通させるほど強くナイフを投擲できるアナタは人間ですか？」

「まじうことなき人間だよ・・・それで君は何の用で來たの？」

えーっと、オレは何の用で・・・あー、そうだ。

「お前朝から『ンドン』何やつてんだ？」うちの部屋に響いてくんだよ・・・部屋に『ゴキブリ』でも出たか？」

「あ、よくわかつたね？朝起きたら『ゴキブリ』が三四も部屋にいてさ・・・」

へえ、平氣でナイフ投げるような女の子でもやつぱり虫は怖・・・

「全部踏みつぶすのに手間取つちゃつたよ。うるさいして！」めんね

(一四) 「

「え？・・・踏みつぶすって、スリッパとか見あたんねえけど・  
なにで踏んだんだ？・・・

「何つて・・・素足」

「ああ、そうですか・・・あんなに音が響くよつた強さで、しかも素  
足でゴキさんを・・・。さて、

「ちよつとーなんでそんないきなり回れ右して逃げるのやー！」

「夢・・・これは夢だ・・・学校だけじゃなくて家の近くにも異  
常人物がいるなんて信じたくない！」

「ちよ、ちよつとーなんか困つてゐなら相談にのみよー？」

「お前が原因なんだよ！」

「あつ！そだ！そいいえば私がちよつと困つてることがあるんだ  
けど、聞いてくれな」とにかくナイフとかそういうところから直し  
ていこう。「ちよつとーそれにも訳があるんだよーつていうか逃げ  
なこでつて・・・

## オリキャラプロファイル

大槻千代

おおつきちよ

性別 女 2 C 所属

身長154? 体重 教えません!

悠介の隣の部屋に住んでいる女の子。元気で優しい子であるが、常識がいくつか欠如している悲しき少女。原作に出てくるだいたいの女の子と同様に意味不明に力が強く、上記のように文月学園の生徒であるが悠介は会った当初は気づいていない。家族はいるが本人の希望で一人暮らしをしており、バイトもしている。得意科目である数学は400点代をとるほど得意であり、逆に苦手としている英語はFクラス並に低い。他の教科はCクラスの平均程度。

第一十問 オレと木皿の繋がり 中編（前書き）

こつもに増して駄文ですが、長い見てくれたら幸いです。

## 第一十問 オレと休日とお隣さん 中編

「それで？困ってる」とて何だよ？」

結局オレはこの子から逃げ切れずに話を聞くことにした。え？そこら辺の女の子からも逃げられないのかつて？この子の肩を掴んで引き留める力は女の子どころか人間の力の範囲を超えてるんだよ・・・。

「あ、うん。こんなところで話すのも何だし、私の部屋に来てよ」「ん？ そつか・・・って待て！ オレの部屋でいい！ その・・・ホラ、近いし！」

素足で潰したゴキブリの死骸なんて見たくないし・・・。

「やつ？ それじゃ、おじやまします」「お、おつ。とりあえず入れ・・・」

知らない男の部屋入るのに抵抗は無いのか？ まあ今はその方がありがたいか・・・。

「男の人の部屋なんて初めて入るケド、結構きれいにしてるんだね？」

「ん、ああ。オレの場合母さんがそういうの厳しかったからな・・・」

・。もう掃除とかが習慣になつてんだ」

「ふーん・・・」

キヨロキヨロとオレの部屋を見渡す女の子。そいつ言えば名前聞いて無かつたな・・・。

「さて、私が相談したいのは・・・と、その前に自己紹介からしようか?」

「ん、まあそうしてくれ」

「じゃあそうする。ん・・・と、大概千代おおつきちよです。よろしくー・スリー

サイズは上から・・・」

「いやいやいや!いいよ名前だけで!自己紹介でスリーサイズ言い出す人なんて初めて見たわ!」

「そう?・・・残念だなあ」

つたぐ、朝から何でこんなにツツコミ入れなきやいけないんだ?だいたい自己紹介でスリーサイズ言う人なんてうちの学校にもいな・・・否定できないなあ・・・なんかいそうな気がする・・・。

「キミは?」

「ん?・・・ああ、火坂悠介。悠介だからコウ君って呼んでね・・・

・とかそういうのは特に無・・・」

「そう、じゃあよろしく、コウ君」

今回ばかりは自分の愚かさを憎んだ。

「早速呼ぶか・・・まあいい、んで、相談したい」とつてのはなんだ?」

「ああ・・・実はね・・・コウ君も来るとき見なかつた?」  
え?んーとオレが朝見た物は・・・。

「ああ、もしかしてあのストーキングをたしなんでいらっしゃる方がのことですか？」

「うん、まあそんなんだけど、なんかその説明の仕方勘にさわるね？」

精一杯の説明だったんだが。

「それでそのストーカーを抹殺したいと？」

「いやー、そこまでする気はないからー、わたしつてどんなイメージ持たれてるの？」

朝からナイフ投げられりやあそんなイメージも持つわ。

「要するにストーカーをどうにかやめさせてほしいとー、」

「わかつてるなら最初から協力してよー！」

うーん・・・お前が朝、家でしたことを言つてやればもう近寄つて来ないとと思うけど・・・。オレがストーカーなら極力近づかない。

「そりだな・・・彼氏でもいるなら見せつけで諦めさせるとか・・・？」

「あー、それはいいね？早速やってみようかな？」

「彼氏いるのか？」

その彼氏は目か頭がおかしいのか？

「ううん、いないけど・・・」

ふう、良かつた、そんな可哀想な人がいなくて。んでないけど・・・

・何・・・?なんかめんどくさいことになりそうな予感が・・・。

「一日彼氏ぐらいいやつてくれるでしょ?」

「はいアウト!それはオレにいろんな危険が降りかかる」とになりかねない!」

今日のオレは余計な」とばつか言つたホントにー

「ええつ! ? 何でさ! ?」

いやいやいや、そんなことしたらわざを余つてるオレはあのストーカーの目の敵にされちまうじゃねえか! ああいう人種が敵に回すと一番怖いんだよ! それに秀吉と一緒に登校しただけで半殺しにされそうになつたのに、もし途中でFクラスの奴らに見つかつたら・・・命はない・・・。

ゴクリ

「一体どうしたのさ? 顔色が悪いよ?」

「大丈夫だ・・・まだ生きてるから・・・ああ、鼓動が聞こえるつて素晴らしいことだ・・・」

「一体キミはどんな状況に置かれているの・・・?」

「ととととにかく! そんなことをしたらオレの命が危ない! だからこの話は無しつて方向で」

「それで? 手伝ってくれるんでしょ?」

え? 話の流れおかしくない?

「いや、だから無理だつて

「手伝ってくれるんだ?」

「ちょっと待て、なんで肘を掴むんだ? あとオレの肘は360度回るわけじゃないぞ?」

「手伝ってくれるんだ？」

「はい」

僕はまだ死にたくないんです・・・・。

「よし、それじゃああとであいつが来たら教え  
「セガラ」やあや! 今から遊べ」「行つね!」

「え？」 おさなから逃げに行こう。

100

「行くのが普通じゃん！」

スには体の日からして蒙て体がたいに

しかもさつきからのやりとりは彼氏彼女の力関係じゃないと思う。

「そんなこと言わない！いいでしょ？別に。わたし部屋庚つて準備してくるね！」

「オイ！ ちょっと待て……」

あ、何？オレの周りには『ううう女しかいないの？

「ねえねえ、ユウ君はどこに行きたい？」

「できれば家に真っ直ぐ帰りたいかな・・・」

「ふうーん、ユウ君はゲーセンに行きたいんだあ。うんーわたしも行きたい！」

「おーい、人の話聞いてる?」

この子はゲーセンより耳鼻科に行つた方がいいと思う。

「ホラホラ！ぼーっとしないで早く行こよー。」

「わっ、腕つかんで走んな！自分で歩くからー。」

あーああ・・・せっかくの休みがなあ・・・。

アタシの気持ちは今かなり弾んでいた。なぜなら・・・

「うう・・・早く家に帰つて読みたい・・・」

最近探していたBし本が手に入つたからである。あんまりコレ出回つてなくて大変だったのよね・・・  
あーっ！早く読みたい！

『ホラホラー！ぼーっとしないで早く行いうよー。』  
『わっ、腕つかんで走んな！自分で歩くからー。』

・・・・・あれ？今の男の人の声、なんか聞いたことあるよつな・・・  
・？あの声は確か・・・。

「声はあつちの方から聞こえてきたわね・・・・・」

行ってみようかな？

「「ウ君、どれがやりたい？」

「どれでもいいや……」「も、うー！ そんなかったるい声出して！ 君が選んだやつならなんでもいいよ（キラーンー）とか言えないの？」

この人の中のカップルの定義ってどうこいつものなんだ……？ オレには理解できん。

「どれっていつもなあ……」

「あーあのぬいぐるみカワライイー！」

そついつて大槻が指を指したのはUFOキャッチャー。人呼んで百円玉回収機！

「大槻、お前あんなもんがやりたいのか！？ あれはな、善良な小学生から姑息な手段を使って金を巻き上げる悪魔の兵器だぞー！」

「キミはゲームセンターにどんな思い出があるの……？」

あんな……一度とあんな経験はしたくない……！

「あれ？ しかもなんで苗字呼びなのさ？ 今は付き合つてるんだから名前で呼んでよー。」

あー、それは言われるとほ思つたんだけどなあ……

「ん……なんか初対面なのに名前で呼ぶつて……なんつーか……

・・・」

「なんつーか・・・・・何?」

「なんか・・・恥ずかしい・・・?」

「」の余話 자체も相当恥ずかしい・・・・・

「・・・・ふふつ、意外とそういうこともあるんだね?かわいい  
つー」

「せんせん嬉しくないからそれ・・・・

なーんかつこみつけなしで忙しいな・・・・。休みの日ぐらいボ  
ケ担当に回りたい。でも別に悪い気はしない・・・・か。

「じゃあ呼び方はもう好きにしていいよ。それより早く遊ぼう!」

「お、おづ・・・・」

「よお火坂、こんなとこひでなにしてんだ?」

「」の声はまさか・・・・

「坂本かよ・・・お前こそ何してるんだ?」

「翔子に寝込みを襲われてな。逃げ回ってる最中だ」

流石は学年主席、行動力も半端じゃない。

「お前はなんだ?デートか?・・・・」りやあ須川たちが喜びそう  
だぜ・・・」「せつか。じゃあオレは霧島にお前の居場所を教えよ  
うかな。霧島が喜びそつ「すまん俺が間違つてた」・・・わかりや  
あいい・・・・」

「ふう、危ない。霧島に感謝しないと。

「それじゃあ俺は家に戻るが、翔子ももう家にはいないだろ?」

お前は「テー」トをせいぜい楽しめや

「黙れ所帯持ち、これは違うって言つてんだろ？が・・・」

「コウ君？何してゐの？早く」ひさきてよー」

坂本と別れて、遠くで大槻がオレを呼ぶ声がしたので声のした方に走る。いつの間にあんなところまで行つたんだあいつ・・・

「・・・・・そこの人、ちょっと待つて」

「ん？オレ？・・・つて霧島？」

「・・・・・あなたは確かFクラスの・・・」

「ああ、火坂だ。火坂悠介」

走つてゐる途中で鬼のような霧島に遭遇した。試召戦争のとき以来だが、どうやらオレの顔を覚えていたようだ。それにしも凄いタイミングだな・・・坂本は命拾いか・・・。

「・・・・・雄一を見なかつた？」

「家に戻るそうだ」

「・・・・・ありがとう。火坂はいい人・・・」

「どういたしまして」

悪いな坂本・・・オレはお前の命より霧島の幸せを応援させてもらひ

おづ。

あ、霧島に口止めすんの忘れた。

## 第一十一問 オレと休日とお隣さん

「ふう・・・ちょっと休憩・・・・・あ、わたしちょっと・・・  
「ん?トイレか?」

「もううつ、そういうのはわかつても言わないものでしょー。」

「そういうもんか?じゃあオレこのベンチに座つて待つてるから

「うん」

トイ・・・「ホン」「ホン、化粧をなおしに行つた大槻を見送りながら、飲み物等が売つてあるコーナーのベンチに腰を掛ける。ふと建物内の時計を見ると、もう針は十一時を指していた。

ああ・・・もう一日の半分を過ぎしてしまったか・・・明日は日曜なのにずっとバイトはいつてるしなあ・・・。こんなに体力消費した状態でのクラスで一週間も生きていけるかな・・・?

「言つて自分で怖くなるな・・・」

なんでこんなこと引き受けてしまったんだ・・・?やつてもなんの得にもなりやしない、その上オレの身に危険が及ぶかも知れないのに・・・。

「でも・・・・・誰かの為に何かをするのって久しぶりかもなあ・・・」

別にそんな嫌な気分でもないし、まあやれるだけはやつてやり・・・。

優子 side

「確かにこっちの方だつたような・・・？火坂君の声が聞こえたのは・  
・・・」

結局アタシは聞こえてきた声の主が気になり、探して歩いていた。

「見つからないわね・・・アタシのせいだつたのかしら？」

・・・つていうかだいたいなんでアタシが火坂君の声が聞こえたと  
してもいちいち探さなきやいけないのよ？ そうよ、アタシには関係  
ないじゃない・・・・

そう思つて帰つとした時、

『 もうひ、そういうのはわかつても言わないものでしょー。』

『 そういうもんか？ じゃあオレこのベンチに座つて待つてるから』

『 うん』

あつ、見つけちゃった・・・あれ？もしかして女の子といる！？まさか彼女！？もしそうだつたらビックリ・・・・・ってアタシに関係無いじゃないそんなこと・・・やつよ、アタシは火坂君に彼女がいようがビックリでもい・・・

「あれ？木下姉じやないか？」

「えつ！？あつ！？ほ、火坂君！？」

うわっ！声かけられちゃつた！ビビビビックリ・・・・

「なにしてんだこんなとこりで？Aクラスの優等生さんはお勉強はしないでいいのか？」

「な、なによ！アタシたちだつて息抜きぐらこするわよー。アソタみたにに昼間つから彼女と遊んでる奴に言われたくないわ！」

「あー・・・・・さつきから見てたのか？」

「えー！？あ、いや、その・・・偶然アンタが彼女といぢやついてるところを見ちやつただけよ！変なこと言わないでくれる！？」

うづ・・・なんでだろ・・・アタシ自分の発言に傷ついてる・・・？やつぱり彼女がいたなんて認めたくない・・・

さつきまでのやりとりを見られてたみたいだ……」こんなこと学校で広められたら洒落にならないから早く誤解を解かないとな……。それにもかかわらず木下姉の機嫌が悪い……なんか怒ってるんだけど同時にひりひり見えるのは気のせいなんだろつか……？

「いや……別にいちいちついてないしあいつは彼女なんかじゃないからな」

「え？ ……そりだつたの？」

あれ？ 木下姉の顔がパッと輝いたぞ？ ……さては人に彼女がいなりのを馬鹿にしてやがるな！ ？ ぐそ……そんな救われたような笑顔をするな……！

「え……じゃあ今のは誰？ 答えてくれるわよね？」  
「ん……と……」

あれ？ ……なんか普通の質問なのにすごい圧力を感じる……。なんであんな眩しいほどの笑顔をしてるのに黒いメラメラとしたものが見えるんだ……？ 答えの選択を間違えれば殺されそうな気がする。てかこれ今田一回田じゃね？

「どうなのよ？」

んー、さすがに今日会つたばかりなんて信じてもられないだろうな……友達つてほどのつきあいもないし……強いて言つならお隣さん？

「あ、お隣さん？」

「どうだー」これなら当たり障りはないはず・・・。

「へえ・・・なんでただのお隣さんと一入つきりで遊んでるのかしら・・・?そこを詳しく聞かせて?」「え?そこは別にどうでも」

「詳しく聞かせて?」

あ、やばいなこれ。まさしくMK<sub>5</sub>秒前だ・・・。  
くそ・・・大槻が行つたトイレはたしかあつち・・・。

「・・・ダッシュ!」

「あつ!ちょっと待ちなさい!」

「死ぬとわかつて誰が待つか!」

「さつきまでいた子は誰なのよー?説明しなさい!」

走れ走れ走れ!捕まつたら命はない!

「あれ・・・ユウ君?どうしたのそんな急いで」

「ちょうどよかつたー今は説明してる時間がないーとにかく逃げるぞ!」

「えつ?あつ、ちょっと待つてよー!」

「なんでそんなに親しい呼び方をされたのよー?とにかく説明をしなさいー!」

「はあ、はあ、はあ・・・びりやら、撒いた、みたいだな・・・」  
「はあ、はあ、・・・もう、いきなり、びりし、たの?」

思いつくり走った結果、木下姉を撒いたようで振り返ると人の影はない。ふと前を見るともうオレと大槻が住んでいるアパートの近くまで逃げてきていた。人間の逃走本能つてす”<sup>ヒ</sup>・・・。

「あ、あれ? も、もう帰つて来ちゃつたんだね? もつと遊びたかったんだけどなあ・・・」  
「別にいいだろ? もともとの目的は  
「ち・・・千代ちゃん? ・・・その・・・男・・・誰?」  
「あ・・・」

声がした方を向くと、朝と同じおつさんがオレを指さしながら、オドオドした様子で大槻に話しかけて来ていた。

「もともとの目的は・・・こいつを追つ払つ」とだら?」  
「うん・・・まあそんなんだけど・・・」  
「その男は誰だ! ? おい、お前一氣安く千代ちゃんに話かけるんじ  
や

「ねえ、ストーカーさん？もうわたしの家の周りをうろついたりしないでつていったよね？気持ち悪いからやめてって」

あ、もうそこまで言われるんだ・・・それでも近づいて来るつて  
すげえ執念だなオイ。

「あ、いや、これは・・・」

「わたしもうこの人と付き合つてゐる。だからもう諦めてくれない  
？」

そう言つて大槻はオレの腕にしがみついて來た。絶対に今の状況を  
だれかに見られませんように・・・。

「え・・・そんな・・・うそだろ・・・？」

「ホントだよ。ねつ？ ユウ君？」

「お、おう大つ・・・千代？」

さすがにここは名前呼びの方がいいだろう。より信憑性を持たせる  
ことができる。さて・・・ストーカーさんの反応は・・・

「・・・・・・ね」

「あ？」

「死ね！」

「うわっ！」

なんて奴だ・・・いきなりナイフを構えて突っ込んできやがった！  
なんでオレと会う人はみんなそういう危険物持ち歩いてんだ！

「おい大槻！お前警察連絡しろーあとたぶん救急車も

「はい、これ」

そういうて逃げていきながら大槻がオレに渡したのは・・・

スタンガン（四十万▽）

「なんで！？何！？いつもこいつの持つてないオレがおかしいの！？オレが間違つてました！？」

「死ね！」

「うわつと！」

また突っ込んできた男のナイフをかわす。なんかまだつっこみたいところはいっぱいだけど、今はこいつに集中しよう。四十万つつうと服の上からでも効くはず・・・よしー

「（チラシ）やれ！坂本！」

「なに！？仲間」

「済まんな、はつたりだ」

相手が振り返った隙に腹に蹴りを入れる。だが少し浅かつたようで男はさらに怒つてナイフを振り回した。そこでもう一度聞合いを取り、男の後ろを見ながら、

「やれ！坂本！」

「またはつたりだろ

「はいよ」

「！？ぐわつ！」

今度は本物の坂本が男の腕をひねりナイフを奪う。そしてオレが近づき、

「はい、おやすみなさい」

バリバリバリ！

「ぐう・・・」

スタンガン発動でミッション成功　いやーホント危なかつた・・・  
坂本が来てくれて助かつたよ・・・まあなんで来たのかぐらい推測  
できるけど・・・

「よお坂本、さては霧島に居場所を教えたのはオレだと推測して報  
復に来てやがつたな？まあ今回はそのおかげで助かつたわけだが」「  
チツ・・・まあそのとおりだ。仕返しに来たのにまさか助けるこ  
とになるとは思わなかつたけどな」

「それなら今から復讐したらどうだ？」

「バカ言え、スタンガン持つてる奴に丸腰でかかつていけるか。お  
前への復讐はとつておぐぜ。それに・・・彼女さんが待つて  
るだろうしな？」

「だから違うつて言つてんだろ・・・あもひお前にやけ顔  
をぶつ飛ばしたい！」

「やつたねコウ君！すごい格好良かつたよ！」

「ん？いやほんとんど坂本が退治したようなもんだろ（ニヤニヤ）オ  
イ！坂本！絶対そこにやけたツラぶつ飛ばしてやるからなー！」

坂本は最後までニヤニヤしながら立ち去つて行つた。

「あ、さつき手伝つてくれた人だね？知り合いなの？  
「いや何でもない」

ただの抹殺目標だから。

「さあもう部屋に帰る・・・それとこのスタンガン、ちよつと貸してくれないか?」

自分の部屋の前まで歩きながら大槻に聞いてみる。「れがないと来週は生きていけない気がするんだ・・・。

「うん、別にいいよ。予備もあるし」

予備も持ってるんだ・・・何の用で持ってるんだろう?おつとせつオレの部屋の前だな。

「それじゃ、今日はこれで。もつ朝からうるさくしたりすんなよ。そしてナイフを投げる時は相手を確認してから投げてくれ・・・これはマジだ」

「・・・え?あ、うん、わかつたよ。・・・今日は本当にありがとう!ーじやあねつ」

そういうと大槻は走つて立ち去り自分の部屋へ駆け込んでいった。ちょっと上の空だつたけどオレの話聞いてたのか?最後はマジのお願いなんだが・・・。

ありがとう!ーか。なんだろう?この感じは?嬉しい・・・のか?まあまんざりではないな・・・。

「部屋の鍵は・・・と、あつた」

ポケットから鍵を出し鍵穴に入れる。今日は面倒な口だつたけど気分は悪くないな・・・さあ早く休も・・・

あれ？ 作者、オチはどうした？ オチがないとつまらん作品がやたらに  
つまらなく

ガシイツ！

あれ？ 木下姉に腕を掴まれた幻覚が見える。

「なんで逃げたのかまで説明したもんつわよ？」

メキメキメキ

あー・・・そういうオチでしたか。・・・なんで坂本にしろこいつ  
にしろ知らないはずのオレの家に普通に来てるんだ？

オレが氣を失う直前に思ったのはそんなことだつた。

## 第一十一問（前書き）

なんか文字数が話によつてぱりぱりですが温かい田で見守つて下さ  
い・・・。

## 第一十一問

オレがFクラスの一員として過「」し始めてからはや一ヶ月。次第に暑さを感じ始めるようになつてきた今日この頃。

文月学園では『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

様々なクラスが創意工夫を凝らし準備に活氣づく・・・そんな中オレたちFクラスでは・・・

「来い！明久！」

「勝負だ、悠介！」

「お前の球なんかお前の顔面にピッチャー返ししてやる！」

「いや！それは危ないから止めて！つていうかさつきからセンター方向の打球が多いのつてそのせい！？」

皆で仲良く野球をしていた。

いや〜、皆仲良くなつたな〜・・・オレもこいつに抵抗を感じなくなつたあたり少しヤバイかもしけないが・・・まあオレ野球大好きだから止める気はないけどな！

バッターボックスに入り明久を見て構える。そろそろサインが出る頃だろう・・・悪いな雄二、そのサイン盗み見させてもらひぜ！

『次の球はカーブを』

カーブか。意表を突かれると厄介だが、待つていればどうぞこの

とは

『バッターの頭に』

「雄一！それは競技的におかしいと思う！野球はそんな怖いスポーツじゃない！」

「おいおい火坂、サインを見るなんて反則じゃねえか」「そんなサイン出すお前に言われたくないわ！」

ホントにこいつは友達なんだろうか？

「貴様ら、学園祭の準備をサボつて何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

鉄人が校舎から凄い勢いで走つてくる。捕まつたら鉄拳で顔の面積を7倍ぐらいにさせられてしまうだろう。

え？逃げなくていいのかって？大丈夫だ。こいついう時に貧乏クジを引くのは大抵

「吉井！貴様がサボリの主犯か！」

明久だから。

親交を深めると共にこいつらのパターンも読めてきたところでもあるのだ。

「雄一です！クラス代表の雄一が野球を提案したんです！」

お、明久が雄一に罪を擦り付けたぞ？雄一はどうする・・・ん？さつきのサイン？

『フォークを 鉄人の 股間に』

「何？明久のフォークは股間までしか落ちないのか？」

「悠介！ツツ『ハリビ』ころが全然違う！『クラスにツツ』役が少ないのはわかるけど投げやりにならないで！」

明久の指摘が図星なのは内緒だ。

「全員教室へ戻れ！」この時期になつてもまだ出し物が決まっていないなんて、うちのクラスだけだぞ！」

鉄人の恫喝が響き、オレたちはさらに設備が落ちているボロ教室へまた連れ戻されることになつた。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが

」

「じぞに座るオレたちを見下ろしながら雄一がよつやくHRを始める。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

面倒くさそうな雄一。どうやら学園祭とかそういうものに興味がないのだろう。かくいうオレもそういう感じなわけだが。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田とこいつどいいか?」

「雄一が島田を実行委員に指名する。オレも島田に一票だ。

「え?ウチがやるの?へん・・・・・、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

「雄一。実行委員なら、美波より姫路さんが適任なんじゃないの?」

「え?私ですか?」

「明久、姫路には悪いが無理だ。いつも時には恐怖政治の方がスピード的に効率がいい」

「そつか。姫路さんだとちょっと優しすぎるかもね」

「火坂?それはどういう意味よ?それにアキも普通に納得してるんじゃないわよ!」

「え!最初に言つたのは悠介じや僕の肘関節が不吉な音をつ!?」

島田に制裁を食らつ明久。島田・・・・・どういう意味かと言われれば、今のお前の行動を理由にしたい。

「まったく・・・。それには、瑞希も召喚大会に出るのよ

「え? そうなの?」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「学校の宣伝みたいな行事なのに。一人とも物好きだなあ」

明久の言つとおり、今回行われる『試験召喚大会』は、召喚システムを世間に宣伝するための企画である。ちなみにオレも出ようかな……なんて思つてたりする。

「あらら、姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「姫路が怒る？ そんなのほとんど見たことないぞ？」

「だつて、みんなのことを何もわかつてないのに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せません！」

「姫路、残念ながらFクラスのみんなはバカだ。」

お前は料理にしろ何にしろ現実をしつかり見据える。

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそつてワケ」

成る程……島田はともかく姫路が出るんじや相当ましなパートナーと組まないとなあ……。Aクラスの知り合いは皆そんなに詳しくないし、アイツと組んだら出る意味がないし……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0481y/>

---

バカとテストと洞察眼

2011年11月23日14時28分発行